

「感激・感動する新しい広場づくりとコミュニケーション能力」

グローバル時代を迎え、学校でも企業でもコミュニケーション能力を高めるが大命題となっています。では、そのためには？

今回は劇作家で演出家、そして大学教授の平田オリザさんと共に、グローバル時代に求められるコミュニケーション能力をどう育て、磨くかについて考えました。

☆スピーチ

▽劇作家・演出家 大阪大学大学院コミュニケーションセンター教授 平田 オリザさん



平田です。宜しくお願ひ致します。

私、本業は、劇作家・演出家で、演劇を作ってみなさんにお届けするのが一番の仕事です。京都でも、芸術センターとか、たくさん上演をさせていただきました。今は、今年で8年目になりますけれども、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターという大学院で、私たちは高度教養教育と呼んでおりますけれども、コミュニケーション教育を行っております。これ、鷺田清一前総長、ま、鷺田先生が副学長の時代ですね、宮原秀夫前々総長の時に作られた機関で、大学院生たちに演劇とかダンスとかデザインとかを直接経験してもらって、コミュニケーション能力とかデザイン力をつけていこうという教育機関です。鷺田前総長の意向としては、博士課程に進む人間は少なくともこのことを必修にしていこうということで、そのプログラム作りを

するのが私の仕事なんですね。ですから、あと数年もすると、演劇をやらないと医者になれないという素晴らしい時代が来るんですけど、まあ、あんまり演技のうまい医者も信用できませんから、ほどほどにしといたほうがいいとは思いますが…。

ことほど左様に世の中、コミュニケーション教育、コミュニケーション教育といわれていまして、まあちょっと、きょうは、本当にコミュニケーション能力って必要なんだろうか、ということ、言われているコミュニケーション能力って何なんだろうかということをお話したいと思います。きょう、付けていただいた演題は、「感激・感動する新しい広場づくりとコミュニケーション能力」となっていて、この「新しい広場」というのは、私が最近出した「新しい広場をつくる」という本があつて、これはまちづくりとか文化行政の話で、これは、もう一つの私の専門であつて、大学でそれも教えています。ただ、その文化行政、まちづくりの話とコミュニケーション教育の話は、私の中ではつながっているのですが、きょう与えていただいた1時間程度の時間で話すのはまず不可能なので、どっちがいいかと聞きましたら、コミュニケーションの方を主にということでした。それで、コミュニケーションの話をしながらか、広場のことにも触れようと思つています。



私の仕事ですけれども、このスライドは、2002年の日韓ワールドカップ共催の時、日本と韓国共同で作った作品です。「その河をこえて、五月」という作品で、日本から6人、韓国から5人の俳優が出演をしました。左から4番目が三田和代さんですね、一人おいてチマチョゴリを着ている方はペク＝ソンヒ（白星姫）先生。韓国の人間国宝クラスの

俳優さんで、この方にも出ていただきました。これは、日本と韓国の両方で、演劇大賞を頂いた初めての作品になりました。次は、同じぼくの代表作で「東京ノート」という一番翻訳されている、多分、15カ国ぐらいになると思いますが、今映っているのは、日韓合同公演バージョンで、手前の二人が韓国人ですね、奥の二人は日本人です。これも日韓両国で上演しました。これは、同じ「東京ノート」のフランス語版ですね。フランスで作ったものです。今、一番仕事が多いのはフランスで、1年の5分の1ぐらいをフランスで仕事しております。これは同じ作品が、「リベラシオン」で、大きく取り上げられました。2面ブチ抜きで劇評が載りました。このスライドは、もっと複雑で、イランと日本とフランスの3カ国合同公演。真ん中がイラン人で、3人ずつ9人の俳優が出ます。

続いてこのスライドは、大阪大学でやっているアンドロイド演劇、あるいはロボット演劇といわれるものです。みなさまもご存知の、あの石黒浩先生という、自分にそっくりのアンドロイドを作ってしまった、あの、先生がうちの大学にいらっしゃるんですが、彼と一緒に、もう、5年、6年目になります、



プロジェクト自体は。まあ、大きな科研費をいただいて、この5年で、既に14カ国、30都市ぐらいを回って上演してきました。きょう、大学の先生もたくさんいらっしゃると思いますが、文理融合って大抵掛け声倒れに終わるんですけど、これほど成果をきちんとあげた文理融



合の試みはまあ、珍しいんじゃないかと思われます。この研究のテーマは、ロボットがどうやって社会の中に入っていかかという事で、そのためには、お年寄りとか子どもとかに怖がられないロボットを作んなきゃいけないんです。ま、それが石黒先生の課題なんです。

私はずっと認知心理の方たちと共同で研究を進めてきていて、例えば、みなさんがですね、あの俳優

はうまいとかあの俳優は下手だなと感じる、まあ、いろんな要素があるんですけど、どういう要素でどう感じるのかという研究もしてきたんですね。そこでわかってきたことは、無駄な動きが適度に入るのが、うまいと感じる俳優であるということなんです。どういうことかという、まあ、ここにものがあるんですね、普通、人間は、ものをガシッととは取らないんです、リポビタミンDの宣伝でもなければ。認知心理の有名な実験があって、^{とって}把手付きの例えばコーヒーカップのような突起物のあるようなものがわかりやすいんですが、このカップを取るといふ動きが、大体4パターンになるんですね。取る時、手前でワンバウンドしたり、全体を把握してからとか、ちょっと他の物に触るとか、こういうのがあって、これ、認知心理の世界では「マイクロスリップ」と呼ぶんですけど、そういう無駄な動きとか「ゆらぎ」みたいなものが入ってくるわけです。しかし、俳優といえどもですね、たくさんの人に見られていて緊張するわけで、そうすると、この無駄な動きが極端に多くなってしまうたり、あるいは逆に、「うまく取らなくちゃ」と思うあまりに、極端に少なくなってしまうりするわけですね。もう一つ、俳優のかわいそうなところは、ちょっと想像がつくと思いますが、稽古をすればするほど、マイクロスリップは減っていきます。うまくつかめちゃうんです。つまり、稽古をすればするほど下手になってしまう。ところが、世の中には天才というのがいて、何度やってもマイクロスリップが入る人ってのがいるんです。どうも、それを、私たちはうまい俳優と呼ぶのではないか。そういう研究を、阪大に移る前に、もう10年ぐらい前、ずっと、東大の先生たちとしてきたんです。

一方で、石黒先生も、どうも、その、ロボットが社会に入っていくためには、そういう無駄な動きがないと怖がられてしまう。そりゃそうですね、こうやってガシッとつかんだら、これは人間的な動きではないから、お年寄りや子どもに怖がられてしまう。ということで、石黒先生も、無駄な動きをどうやって入れていかかということが課題だということには、2000年前後には気づいていた。ただ、きょうも工学系の先生方がいらっしゃればわかると思いますが、工学者というのは、基本的にはガシッとつかみたいんですよね、本能的に。産業用ロボットってのは、いかにうまくつかむか、純粋な従来型の工学でいえば、これがとても大事なことだったんだけど、そうじゃない部分が必要になってきた。それで、石黒先生は、言語学とか認知心理とかの力を借りて、このランダムなものを入れようとしてきたわけで

すけれども、心理学とか言語学は、基本的に学問の性質上、統計をとって平均値を出す学問なんですね。そうすると、いろんなランダムは、全部平均値に埋め込まれてしまうから、ランダムをプログラミングするというのは非常に難しいことなんです。じゃ、適当にランダムにすりゃいいじゃないかというわけですが、そうやったところで、どうやってもリアルな動きにはならない。

そんな頃に、私が阪大に赴任いたしまして、1年ぐらい経って、鷺田さんと立ち話をしていた時に、何かやりたいことがあるかと聞かれて、「ちょっとロボットと演劇やりたい」と答えたんです。すると、「早くやってくれ」と石黒さんをすぐに紹介されたわけです。そこで、石黒さんと意気投合し、学生たちにもよく言うんですけど、同じ山を別々の登山口から登って、7合目ぐらいでちょうど会ったというような感じでした。だから、加速度的に研究が進んだんです。

今も、そういう研究をやっているんですけど、阪大の基礎工学の学生たちがプログラミングしたものをを見せてもらって、例えば、2分間ぐらいのシークエンスのものに20個ぐらい、「ためだし」と言いますが、演出を付けるわけですね。20分ほどでプログラムを書き換えてやってみると、明らかにリアルなものになる。当時、5、6年前、研究を始めた頃の石黒先生の若い研究者に対しての口癖は「お前たちが2年かかった

ことを、平田先生は20分でやったから、もう研究はいいから分析だけをしろ」でした。実際、今、ぼくが演出するとなぜリアルになるかを分析し、それを特許にしたりもしているんですね。要するに、演出家、芸術家というのは、最初からランダムをプログラミング化する能力を持っているので、それを解析することによって、平均値では表せないものが出てくるというわけで、そういうことをやってきました。

さらに、次の段階としては、新しい科研費が取ればなんですが、ぼくは、今、直接、ロボットにプログラミングができるんですよ。例えば、スライドのこのロボットは、15ぐらいの関節が動くんですが、その15の関節が全部ウインドウ（ズ）で出てきて、例えば0秒の時点では右肩がこの高さなのが、15秒の時点ではこの高さというふうにマウスでクリックすると、ナチュラルなカーブで動くというソフトを作ってくれたんですね。最初のうちは、ロボットを見ながら動かしていたんですが、今は、15のウインドウ（ズ）と音声のウインドウを見ながらだと、ロボットを見なくても、全部プログラミングできるんですね。パッとやってみると、ロボットがぼくの思う通りに動く。これ、世界中でぼくだけができる技術です、なんの役にも立たないけれど…。でも、工学者に言わせると、どうしてできるかわからない。それは、ぼくが演出家だからできるんですね。演出家は、そんなことを2500年もやってきたの



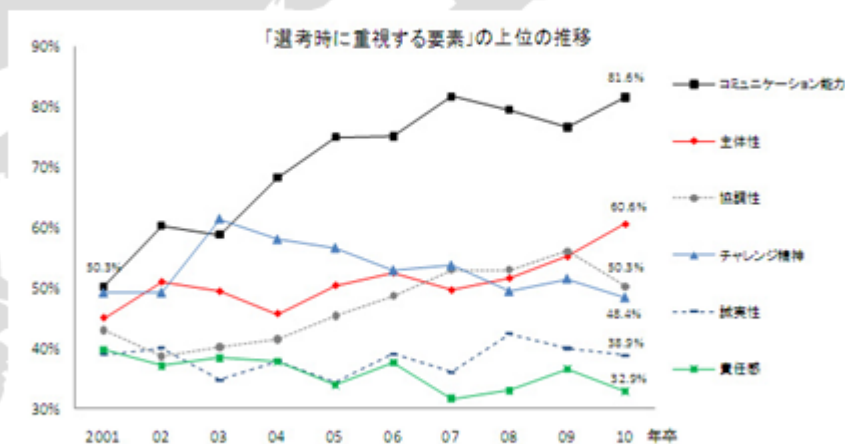
で、まあ、それができるといことなんですね。

それを今、何に使おうとしているかという、例えばですね、自閉症の子どもたちの訓練とか、失語症の方たちの機能回復のリハビリに使えないかと、次の段階では考えています。これ、もう臨床例では出てきていて、例えば、自閉症の子どもってというのは、他人の感情が理解できないわけですけど、臨床の世界では、すごくわかりやすくやると「わーい！わーい！」という動きを何度もやらせることによって、「嬉しい」という感情がちょっとずつ理解できるようになる、というようなことがいわれています。よく、心理学の世界で、最近「動きが心をつくる」というふうにいるんですけども、私たちは、嬉しいから笑うのか、笑うから嬉しくなるのか、これは双方向であるっていうのが、最近の最先端の心理学の考え方ですね。

なので、今、私たちは、ある動きの曲線、動けばデータが曲線が出るわけです。音声もデータで、波形で出る。そうすると、自閉症の子たちは、そういう波形をなぞったりするのはすごく得意なんですね。しかも、繰り返しを厭わない。で、しかもですね、これ臨床例では実証済みなんですけど、アンドロイドとならしゃべれるって自閉症の子がいるんですね。人間だとダメだけど、アンドロイドなら怖くないという子がいるんです。そうすると、アンドロイドと一緒に同じ訓練を繰り返したらいいんじゃないか。今まで、自閉症は、ご承知のように、ある局所的な脳の細胞の萎縮なんですけど、それを補うためには、腰痛を防ぐために周りの筋肉を鍛えるのと同じで、周りの細胞を活性化させていくしかないんですね。もちろん薬の力も借りながら。で、周りの細胞を活性化させるために、そういうことが使えないだろうか、とか。あるいは、失語症の場合は、今度は50代、60代の方が圧倒的に多いので、このリハビリの最大のネックはプライドなんですね。要するに、若い作業療法士や若い言語聴覚士と一緒にやるのが、子ども扱いされるような感覚で辛い。これまた、ロボットと訓練することによって、多少、もしかすると、回復が早くなる可能性がある。そういうことで、今まで、石黒先生とぼくがやってきたロボット研究が、そういうところにも役立つならばですね、患者さんや家族にとっては大変な福音になるし、画

期的な治療法になるわけですね。そんなことを、今、やっております。まあ、ここまでが、自己紹介です。あっ、それと教育面では、小学校、中学校の国語の教科書も作っておりますので、最近でも、お隣の滋賀県の滋賀大教育学部附属小学校で講演させていただきましたけども、そういったところでの演劇を使ったコミュニケーション教育を行っております。

コミュニケーション能力



資料：日本経団連「新卒採用に関するアンケート調査」(当該設問は2000年度(01年卒採用)から調査開始)
※選考にあたって特に重視した点を25項目より5つ回答。全国各企業のうち、その項目を重視した割合を示している。

では、これから、きょうの本題「コミュニケーション能力とは何か」ということに移ります。今、ス

ライドで示しておりますのは、経団連が行っている経年調査です。これは、人事採用担当者に、自分の会社が採用にあたって重視しているものを、25項目の中から5項目を選びなさいと尋ねた調査です。この図では、2010年までしか出ておりませんが、もう、2012年までの統計が出ていて、実に、9年連続で「コミュニケーション能力」がトップです。しかも、それが2010年では80%を占め、ダントツのトップ。2位は、「主体性」ですが、それは、60%です。ちなみに、「語学力」という項目もありますが、それ、何%だったかわかりますか。何と、2010年では、たったの3%、厳密には2.6%でした。もう英語だけでできて就職できない時代なんですね。実際には英語ができる子は、コミュニケーション能力が高い子が多く、相関性が強いので就職できるんですけど、もしも、英語はできるけどコミュニケーションが苦手という学生がいたとしたら、その子は就職できないという時代になってしまったというわけです。まあ、これがいいか悪いかは別の議論で、現状はそうなっているということなんです。

最近、PISA調査のことが、また新聞を賑わせました。これ、みなさんもご存知と思いますが、OECDがやっている世界中の15歳の子どもたちが受ける学力試験で、3年に1回行われています。この試験で、2000年代、日本の子どもたちの、特に読解の項目が8位から14位、15位とギリ貧になって、これが、学力低下問題の議論のきっかけになったんですけど、実際には、参加国数が飛躍的に増えた時代だったので、有意な数字で日本の子どもの学力が下がってきたわけではないんですね。それから、このPISA調査は、何でかよくわからないんですけど、小さい国の方が有利ということなんですね。だから、上位に行くのは、フィンランドやリヒテンシュタインとかで、人口が極端に少ない国が有利なんです。人口5千万人以上で日本より上位にきたことがあるのは、何かの課目で、イギリスが1回あっただけで、日本は、5千万人以上というカテゴリーにすれば、常に1番です。まあ、そんなに問題はないとはいえませう。ただ、これを逆手に取ったのが中国で、上海という地域だけで参加して、いきなり1位に躍り出ましたね。さすが中国ですよ。日本人はそんなこと考えませう。真面目ですからね。国で参加するものと思っていたけど、地域でもよかったんですね。今、上海と香港が1位、2位を争っています。

今、日本の子どもの学力低下は問題ないと言いましたが、実は、全く問題がないわけではないのです。日本の子どもは「白紙回答率」が非常に高いといわれています。もう、ご承知のように、今、日本の教育界が抱える最大の問題は、「フタコブラクダ現象」です。いい問題を作れば、普通、徐々に平均点付近が多くなっていくならかな台地（ヒトコブラクダ型）のような成績分布になるはずが、平均点の子どもが少なく、できる子とできない子が二極分化するフタコブラクダ型になってきた。要するに下側の子どもたちが、全くモチベーションを失っているということなんですよ。その子たちが白紙で答えてしまうために、平均点を下げてしまうのではないかと。もう少し厳密に言うと、正解が二つ以上ある設問に関して、白紙回答率が高かったといわれている。日本の今までの教育は、先生が正解を隠し持っている、それを当てるような授業をずっとしてきたために、正解が二つ以上あると、何を聞かれているのかさえわからずに諦めて、白紙回答をしてしまう。逆にいうと、これ、何か書けば、大体点数がもらえる問題なんですよ。でも、それができない。だから、そこで大きく差がついてしまったのではないかと、ともいわれています。

このPISA調査に関する話題の中で、これもお聞きになった方も多いいと思いますけれども、日本の教育界に一番ショックを与えたのが「落書き問題」といわれています。「ある人が、自分の家に落書きされて迷惑している」。もう一方の人は「落書きもアート。世の中には、もっと醜悪な看板とかがある。こっちを規制しろ」という投書がそれぞれインターネットに出た。問題ではもう少し項目が多いのです

が、簡単に言うと、「さあ、どうでしょう」という問題です。しかし、これは、日本の子どもにとっては、「え、何を聞かれているの?」と思ってしまう問題なわけですね。「落書きって悪いに決まってるじゃん」というのが多くの子どもの思うことです。

ぼくは、大学院とか高校、中学校でディスカッション型の授業、カフェ型の授業とかやっているの、少し設問を変えて「君たちの家とか公共施設で落書きをされ、許せるのはどういう場合か」ということで学生とディスカッションするんです。主なものをいうと、「きれいだったら」とか、「観光資源、財産になる」、「その人にとって価値がある」これは、例えば、SMAP ファンなら、「草薙くんが酔っ払って描いたもの」ならOKというわけです。これ、小学生だったと思いますが、いいなと思ったのは「あした取り壊し予定だったら」というのがありました。これすごい発想の転換で、落書きのことばかりではなく、壁のことを考えたわけですね。それと、大学生ですけど、1000人か500人にひとりくらいかな、こんな答えがたまあに出てきます。「独裁国家だったら」。要するに、落書きでしか表現できない国で、命がけで夜中に書いた「打倒!〇〇体制」というようなものを、私たち民主主義国家に生きている人間が、もうしょうがないなあ、落書きをして、と消せるかなということ。要するに、OECDがPISA調査で求めているものは、国家体制、政治体制が違えば落書きでしか表現できない人も世界にいますよということに思いをはせる能力を、子どもたちに要求しているのです。これが、本来的な意味での異文化理解能力です。よくいわれるグローバル教育ですが、これは、要するに、世界の多様性を理解する、それに思いをはせる、あるいは共感するということです。

OECDがなぜ、PISA調査をするかっていうことは、要するに、世界の潮流は、もう多文化共生にあるわけですね。しかし、多文化共生はきれいごとではなくて、最初はちょっと大変だけれども、ひとつの組織、ひとつの会社、ひとつの地域、ひとつの国家にです。いろいろな民族、いろいろな人種、いろいろな文化、いろいろな宗教の人が混在していたほうが、最終的には持続可能な社会になりますよ、ということなんです。生物多様性と同じで、これが、多文化共生社会の基本的な考えです。だから、その、「最初のちょっと大変なところ」を乗り越える能力を、子どもたちにつけてやってくださいというのが、OECDがPISA調査を通じて世界の先進国に要求していることなんです。よく、こういう話をすると、日本の先生方は真面目なんで、「ああ、金子みすずですね。『みんなちがって、みんないい。』ですね」というんですね。そうじゃないんですね。そうだったら楽だが、現実には「みんなちがって、大変だ」ということで、その大変さを克服する力を子どもたちにつけるというのが、PISA調査が一番目指していることなんです。

ぼくは、これをよく「協調性から社交性へ」というふうによんでいます。まあ、芸術家的な人間に多いんですが、ぼくも「平田くんは、自分の好きなことは一生懸命集中して頑張るが、どうも協調性にかけるようです」ということを、小学校1年生からずっと通信簿に書かれてきて、こういうのが、芸術家とか作家になるわけですね。ぼくは、協調性はないです。でも、演劇は、集団でやる芸術なので、社交性はあるわけです。幕が降りるまでは、どんないやな人とでも、どうにかしてうまくやるんですね。プロの世界なんてひどいもので、舞台上で「あなたがいなけりゃ、死んじゃうわ」みたいにやっても、楽屋ではそっぽ向いているという連中がたくさんいる。これも社交性ですね。もう、沢尻エリカみたいなばっかりですね。でも、あの人、あれを外でやるからいけない。やんなかったら最高の女優ですからね。それでいいんです、私たちの世界は。

ただ、日本では、この社交性というのは、^{うわべ}上辺だけの付き合い、表面上の交際といってマイナスのイメージでした。私たちは、「心から分かり合える関係を作りなさい」「心から分かり合えなければコミュ

ニケーションではない」というふうに教え育てられてきています。確かに、「心から分かり合える」というこの関係は耳に心地良いんですけども、これは島国、村社会の論理だと思うんですね。これ、後でもうちょっと触れますけれども。要するに、最初から分かり合えない人を、排除してしまう。人間は、分かり合えるものだというところを出発点にし、終着点にしてコミュニケーションというものを考える。しかし、本来、私たち、わからないことってたくさんありますよね。パレスチナの子どもの気持ちはわからないし、イラクの人たちの気持ちもわからない。わからないからほっといていい、ということではなくて、わからない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて最悪の事態である戦争やテロを回避するというのが外交であり、国際関係なんだと思うんですね。

そうすると、これから、否でも応でも国際社会を生きていかなければいけない日本の子どもたちに、協調性がなくていいとはいいません。しかし、日本の子どもたちは、世界標準から見れば、まだまだ集団性は強い方ですよ。そうすると、教育というのは、プラス α で何の能力を植え付けていかなきゃいけないのかと考えていくと、社交性、要するに異なる文化、異なる価値観を持った人たちと、どうにかしてうまくやっていく力が、これからの日本の子どもには必要なのではないかということなんです。こういったものを、異文化理解能力とか合意形成能力と呼びます。

これもご存知のように、PISA調査でいつも上位を占めてきたのが、フィンランドでした。フィンランド・メソッドという言葉で流行してですね、特に、京都市はフィンランド・メソッドを小中学校の教育に大きく取り入れているわけですね。国語教科書が翻訳もされていて、もし関心のある方は読んでいただけたらいいと思います。その時、ぜひ見ていただきたいのは、各単元の最後で、演劇的フィニッシュになっているものが非常に多いんです。例えば、「きょうの物語の先を考えて人形劇をつくってみましょう」とか「読んだ小説の一番面白いところを劇にしてみましょう」、あるいは「きょうのディスカッションを利用してラジオドラマを作りましょう」とか、集団でやる表現になっています。

これ、なんでかという、フィンランドに代表される今のヨーロッパの国語教育の主流は、インプット、感じ方は人それぞれバラバラでいい。当然、文化や宗教が違えば、例えば、さっきの落書きなら、絶対ダメというのもしあれば、まあいいんじゃないの、さらに、亡命したオレの国では落書きでしか表現できなかった、など答えはさまざま。同じひとつの教室の中にいろんな考え、境遇の子どもがいるんです。これを、インプット、感じ方を強制することは危険でさえある。教育で強制してはならないということです。しかし、このバラバラな人間がひとつの社会を構成するので、アウトプットは必ず一定時間内にひとつのものを出しなさいっていうのが、フィンランド・メソッドのキモなんですよ。これ、私たちが受けてきた日本の国語教育と真逆になっていることがわかると思うんですね。私たちは、「この作者の言いたいことは何でしょう。50字以内で答えなさい」、○か×かのように、インプットは極端に狭められて、アウトプットは、スピーチとか作文とか個人に任されてきた。

きょうは経営者の方もたくさんいらっしゃると思うんですが、じゃあ、現実の社会はどっちが近いですか。アウトプットがバラバラでいいなんて会社があったら、あっけなく潰れちゃいますね。その前に、



商品、製品開発すらできないですよ。でも、どんな企業も若い多様な意見は必要なわけでしょう。そこで、大事になるのは誰がまとめたかなんです。実際に、授業では、A君、Bさん、Cちゃん、Dさん、Eくんといろんな意見が出ますね、多分、日本だったら、採用された意見を発表したBさん、あるいはユニークな意見を述べたD君が褒められる。しかし、フィンランドでは、これらの意見をまとめたF君が褒められる。これ、日本でいきなりやったら、「え、F君何も言っていないじゃん」となると思います。でも、フィンランドでは、何も言わなくても、まとめた者が一番評価される。どうも、私たちには幻想があったんだと思うんですね。欧米の教育は個性尊重、ユニークな意見を言った人が褒められる、と。でも、そうじゃないんですね。ユニークな意見が出るのは当たり前なんです。人種や民族が違う、宗教も違うんですから。そのユニークな意見をどうやってまとめたか、というのが一番評価の対象になる。これが合意形成能力であり、最近では、その前段として人間関係形成能力というような言葉が使われています。こういうものが、日本でもこれから求められるんじゃないか。



ちょっと話を戻しますが、今、日本でコミュニケーション教育、コミュニケーション教育といわれるわけですが、実際に、日本の子どもたちのコミュニケーション能力が低下しているのかということですね。これは、冷静に考えなければいけないと思うんです。まず、結論から言っておきますと、どんな言語学者、社会学者に聞いても、日本の子どもたち、若者たちのコミュニケーション能力が低下しているという科学的な数値は全くありません。どちらかというと、上がっているんじゃないかという統計のほうが多いんですね。大体、日本の子どもたちのコミュニケーション能力が落ちている、と言っているのは、ホントの教育の現場を知らない「おやじ評論家たち」なわけですね。そういう評論家たちには、でも、あなたたちより、今の小学生の方がダンスはうまいと思いますよ、と言ってあげたいといつも思う。ダンスが、踊るということが、自分の気持ちを他者に表現する最高の手段である民族、国家というのがありますよね。ブラジルとかキューバ、日本の中でも琉球とか、いっぱいありますよね。そういう国においては、私も含めた日本の中高年の男性は、最も表現力のない、コミュニケーション能力の劣った「部族」ですよ。要するに、世界中で、しかも時代も超えて普遍的なコミュニケーション能力なんてないってことなんです。コミュニケーション能力はいろんな要素があるので、普遍的なものはない。しかも、言語、コミュニケーション能力は自己中心的になります。だから、ぼくはよく、就活している阪大の子たちについてのは、「コミュニケーション能力がない」といわれたら、反論したらいいんだよ。少なくとも、それは科学的な発言ではない。もし、少なくとも、言語において正確を期すならば、「お前はオレが要求しているコミュニケーション能力がない」というなら、まだ正確だが、その時は、「はい、あなたが要求しているコミュニケーション能力はないけど、私は、もっとすばらしいコミュニケーション能力を持っています」と反論すればいいと。もっとも、その後に「そう言ったら、就職できないけどね」と付け加えますが…。

じゃあ、コミュニケーション能力に何にも問題がないかということ、そうではありません。火のないところに煙は立たない。では一体、何がコミュニケーション能力において問題なのか、ということは、特に、教育の現場にいる側は、きちんと問題を切り分けて考えていかなきゃいけないと思うんです。その一つを、ぼくはずっと「単語で喋る子どもたち」というふうに説明をしてきました。今ですね、小学校

の高学年になっても単語でしか喋らない子が増えているんですね。幼児期、幼稚園まではみんな単語でしか喋らないんです。これが、他者と出会うことによって、文というものを獲得していく、というのが言語発達の過程です。ところが、小学校高学年、あるいは中学生になっても単語でしか喋らない子が増えている。ただですね、こういう子どもたちを見ていると、どう見ても、この子たちの責任ではないだろうと思うんです。ちょっと考えていただいたらわかると思います、昔みたいに兄弟が多ければですね、「ケーキ、ケーキ」といっていても、無視されるか、あるいはケーキをぶつけられるぐらいで、何ともなんなかったと思うんですが、今は、優しいお母さんで一人っ子だと「ケーキ」と言っただけで、ケーキを出しちゃうでしょう。もっと優しいお母さんなら、ケーキって言う前にケーキを出しちゃう。言語というのは、使わなくていいものは使わないように、使わないように変化する。省略する方向に変化するという原則を持っているんです。なので、「ケーキ」と言ってケーキが出てきたら、「ケーキ」としか言わなくなります。決して、ケーキを「どうしたい」のかは言わなくなります。

実は、これ、家庭だけの問題じゃないんです。学校でも、優しい先生。それから、友だち同士は、もういじめはする方もされる方も嫌なので、すごく気のあった4、5人の友だち同士でずっと行動します。これが中学でも高校でもそうです。そういう温室のようなコミュニケーションの中で育てられて、高校、大学、大学院にまで来て、いきなり、「はい、コミュニケーション能力がないと就職できませんよ」、「グローバルスタンダードの説明責任です」、「コンプライアンスです」と突きつけられるわけです。もちろん多くの若者たち、学生は、これに順応していきます。しかし、ちょっと心の弱い子は、やっぱり怖がってしまう。心を病んでしまうっていうことですね。これ、よく、大学の教員間で笑い話のようにいわれることなんですけれども、レポートを書かせて提出させますね。それで、ちょっと厳しく添削して返すと、「先生、私のことが嫌いなんでしょう」と言ってくる学生が一定数いる。どの大学のどのレベルにもいる。これ、どういうことか。私たちは仕事ですから、好きも嫌いもないんですよ。だけど、自分のことをわかってくれないのは、嫌いだからと思う。今までは、全員がわかってくれたから。

もう一回整理します。普通、私たちの社会というのは、社会人であっても、自分のことをよく知っている人なんて、せいぜい周りの100人とか200人です。家族とか同僚、友だちとか。学生でいえば50人とか100人でしょう。それ以外の膨大な他者、これを「世界」といってもいい、が広がっているわけでしょう。この他者というのは、本来ニュートラルですね、知らないんだから。プラスでもマイナスでもない。ところが、ものすごく小さな、ものすごく温かい温室のようなコミュニケーション、全員がわかってくれるようなところで育てているから、わかってくれない他者は全部マイナス、敵なんです。これ辛いですね。要するに周りの50人、100人以外の後の60億人全員が敵です。どうなりますか。引きこもる以外ないですね。引きこもりとかニートというのは、まさに温室のようなコミュニケーションの中で育ててしまって、いきなり、社会に出る直前にコミュニケーション能力を要求するという、このギャップが子どもたち、若者たちを追い詰めた結果だというふうに、ぼくは考えています。

あるいは、こういうこともあります。ぼくは、日本中回ってまして、先々週は、兵庫県の城崎に行ったんですけど、城崎小学校は1学年25人1クラス、しかも1年から城崎中学校3年までずっと同じで、クラス替えもなしです。こういうところもたくさん日本にはあります。そういうところで、先生だけががんばって、「表現教育をしましょう。これからコミュニケーション大事だから、それじゃ太郎くん前に出てきてください。みんなよく聞いているから、3分間がんばって」というんですけど、これスピーチにならないんです。なんでかという、みんな太郎くんのことをよく知っているんです。太郎くんも喋ることが何にもないんです。要するに、表現というのは、他者を必要とするんですが、教室に

は他者がいないんです。これ能力の問題じゃないわけですよ。意欲がないわけですよ。一生懸命伝える必要がないんです。みんなわかってくれている。みんな知り合いで、みんな友だちですから。こういう社会を、私たちは作って来てしまったんです。その中で、私たちは、コミュニケーション教育だ表現教育だといって、ディベートだスピーチだといろいろ子どもにやらせてきました。しかし、そういう伝える技術をいくら教え込もうとしたところで、子どもたちの側に「伝えたい」という気持ちがなければ、その技術は定着していきませんよ。

じゃ、その「伝えたい」という気持ちは、どこから来るかという、ぼくは「伝わらない」という体験からしかこないと思うんです。今の子どもたちには、この「伝わらない」という体験が、決定的に不足しているのではないかと。だから、「伝える技術」を教えるような教育から、「伝えたいという気持ち」を持たせる教育に変えていく必要があるわけですよ。これは別に、子供を千尋の谷に落とせということではなくてですね、一番いいのは、やっぱり体験教育なんですよ。障害者施設に連れて行ったり、高齢者施設に行ったり、外国の方とたくさん接触させるなどして、価値観とかライフスタイルのぜんぜん違う人とできるだけたくさん出会う。しかし、これもですね、公立の小中学校だと限界があるわけですよ。人員や予算。それから意外と大きいのは、セキュリティの問題で、今、子どもをそんなに外に出せない時代になっちゃったんですね。で、ここでも注目を集めているのが、私がやっているような演劇的な手法を用いた教育ですね。演劇は、体験教育ほどの力はないんですけども、要するに疑似体験、シミュレーションができるわけですよ。転校生のこないクラスでも、転校生を演じ合うことができる。他者を演じ合うことができるわけですよ。こういうことが、今、演劇教育が見直されているひとつの視点じゃないかと思えます。

まだ、他にもあります。「コミュニケーション能力問題の顕在化」と私が呼んできたものです。これはですね、若者たちのコミュニケーション能力が上がっているといっても、クラスには、口下手な子とかおとなしい子が、必ずいるわけですよ。そういう子たちは、昔、男の子なら、旋盤工とかオフセット印刷とか、文字通り手に職をつければ一生、生きていけたんですよ。ところが、今の日本の製造業は相当厳しい状況になって、そういう子たちの就職口がない。つい10年ほど前までは、無口な職人っていいイメージだったわけなんです。ところが、今は、無口だと就職できない。製造業の方が失職してしまうと再就職が難しいのも、コミュニケーション能力の問題が大きいといわれています。要するに、自己アピールができない。でもですね、50代以上の日本の男性は、子どものころには、男親から、「男は自慢話をするものじゃない」と教育されてきたはずなんです。かわいそうでしょう。そう言われて育ってきたのに、40、50になってから、自己アピールができないと就職できませんよって、これひどい話ですよ。コミュニケーション能力がなかったら就職できないというのは、差別だっていう考え方もあります。私、これに大変共感はしますけれども、教育の現場にいる人間としては、そうはいってられない。教育というのは、社会の変化に応じて最低限の能力を子どもに教えて社会に送り出すというのが、仕事なんです。

もう一点、この「無口な職人が就職できないのはかわいそう」というのは、何となく、印象としてはそうなんですけど、もうひとつ別の視点もあるんですよ。無口な職人が無口な職人でいられたのは、製造業が完全な男性社会だったからですよ。でも、今は、どんな製造業の現場にも、女性もいれば、外国人労働者もいるわけですよ。そうすると、やはり無口な日本人男性は、ちょっと怖いんですよ。そういう方たいから見ると。だから、無口な職人が就職できないのはかわいそうと、無口な職人を社会的弱者と捉えるならば、それはそうなんだけれども、より弱い立場の方たちが労働市場に参入してきた時には、

無口な職人たちも変わってもらわなきゃいけないんです。要するに、お茶を出されたら、「ありがとう」といえるぐらいの最低限のコミュニケーション能力は、やっぱりつけてもらわなくちゃいけない。そういう時代になってきたっていう認識が、必要なんだと思うんですね。

もうひとつは、これのほうが、みなさんにとっては身近かもしれませんね。「コミュニケーション能力の多様化」という問題です。これはですね、子どものライフスタイルが、私たちの育った頃に比べてものすごく多様化しているので、学校経営が大変難しくなっている。昔は子どもの数が多かったんで、ひとつの団地でひとつの小学校とか普通だったんです。大体、みんな似たような家庭環境だった。しかし、今はですね、わかりやすい例で言うと、兄弟の数ですね。昔は、一人っ子ってクラスに1人か2人しかいなかったんです。今、2、3割。京都、大阪、東京の都心部だと、恐らく4割ぐらいという学校もあると思います。兄弟が多いか少ないか、それと意外と大事なものは、異性の姉妹がいるかどうか。それから、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしているかどうか。京都なんかまさにそうですね、商店街で育ったか団地で育ったか、セキュリティの厳しいマンションで育ったか。要するに、近所づきあいがあるか、親戚づきあいがあるかどうか—こういうことによって、子ども一人一人が。それまで大人とコミュニケーションをどのぐらいとっているか、その量がものすごく違い、ばらつきが出る。

極端な場合、阪大でも京大でもいると思いますけど、理系の学生で二十歳過ぎまで、自分の母親以外の年上の女性と話したことがないという学生が一定数いるんです。これもね、昔は、それでもよかったんだと思うんですよ。助教、准教授、教授とそのまま出世して、教授に紹介された同じような環境で育った女性とお見合い結婚でもすれば、あんまり社会に迷惑をかけることもなく、「あの教授、ちょっと変わっているよね」、ぐらいですんだんだけど、今は、どんな研究室にも女性もいるんです。外国の方もいます。そうすると、「いやあ、ちょっと私、女性は苦手で…」では困るんです。これは、偏差値とは全く関係なく起こります。ぼくは、阪大に来る前は東京の中堅私立大学にいましたが、そこでは、もう、就職に有利な学生は2種類しかないといわれていた。一つは体育会系の学生、もう一つはアルバイトをたくさんやっている学生。これ、つまり、大人との接触到に慣れているかどうか。これ慣れの問題なんです。慣れられるんです、誰でも。

ところが、慣れる環境がなくなってしまった。昔なら、自然状態で慣れたのが、そういう環境がなくなってしまった。ぼくは、よく学生に、「そうはいつでも、世の中では、二十歳過ぎたら『慣れも実力のうち』と思われるんだよ」といいます。それはそうですね、みなさんの会社に就職試験で面接に来て「いやあ、ぼくコミュニケーション能力はあるんですけど、慣れていなくて」なんていっても、相手にされないでしょう。「慣れとけよ」って話ですね。

これも、偏差値とは全く関係なく、慣れと環境の問題なんですけど、ぼくの見立てるところでは、偏差値の高い子ほど、この問題の発見が遅れるんですよね。バレないんですよ。ぼくが、金沢の市長のアドバイザーをした時に、金沢の市の職員が二人、東京のぼくの家にはやリングに来たんですね。それで、教育政策に関連して今の話をしたんです。そしたら、二人が顔を見合わせて「ああ、彼だ」という。金沢市の職員にも、女性と話せない職員がいたんですね。いい大学を出て、公務員試験もペーパー中心ですから、それで面接官も男性ですので、一回もばれずに合格して、いざ、窓口に立ったら「私、女性は苦手です」と。困るでしょう。こういうことが現実には起こっている。これが多様化です。ちなみにですね、私たち、コミュニケーション教育に関わる人間の間では、「中高一貫」「男子校」「理系」これを、「コミュニケーションの三重苦」と呼んでいます。この中にもたくさんいらっしゃると思いますが、あるいは、息子さんがそういうところに行っていたら気をつけてください。

ぼくは、東京の駒場というところで生まれ育って、今も暮らしているんですが、そこにある筑波大附属駒場という超エリート校で、国語の先生と新しい国語の授業を作るというのをやっています。その先生が、なぜ、国語の授業に演劇を取り入れることにしたかという、もともと演劇部の顧問をしていたこともありますけど、担任のクラスに数学オリンピックの金メダルをとった子がいて、そのお母さんが、「うちの子は数字にしか興味がないみたいで、心配です。結婚できますでしょうか」と面接で相談されたのがきっかけだったんですね。それで、まずいと思って、演劇を授業に導入して、社会のシミュレーションをしようと考えたということでした。彼からはよく「だれでもいいから女優さんをよこしてください。女の子とちゃんと喋れない子が多いんで」といわれる。まあ、うちの女優は、どんな男性とでもコミュニケーションをとれる能力を持っていますから。学校でこういう体験もして、少しでも女性や社会に慣れてもらうことも、今は必要になっているのかなと思います。

ところで、こう話すと、え、そんなことまで学校でやる必要あるのって意見が、必ず出てきます。私、大阪大学でそういう授業やっていて、しかも大学院ですからね。当然、風当たりも強いんです。医学部や工学部の先生で、「遊んでいるだけじゃないか」とおっしゃる方もいる。実際、演劇作らせ、ダンスとかやらせるわけですからね、大学院生に。「大学院は、教養を身につける場ではない」、と公言される先生もいらっしゃる。もっと始末におえないのは、「そんなもんは、現場で身につけたもんですけどな、わはっは」みたいな先生です。しかし、その現場というのは二つ問題を抱えていると思うんです。ひとつは、その現場というのは、昔の工学部、医学部の上意下達型の、「オレの背中を見て学べ」みたいな、そういうコミュニケーションですね。でも、今必要となっているのは、ジェンダーとか国籍、民族、宗教、そして世代も超えて、お互いが、対等な関係、フラットな関係で議論ができるようなコミュニケーション能力が必要とされている。これは、学校できちんと教えていかなきゃいけない。

もうひとつはですね、その「現場」ってものがなくなってしまった、ということです。例えば、今阪大でも、25歳ぐらい、医者や看護師になる直前で、そこまで、身近な人の死を一度も経験していないという学生がたくさんいます。おじいさんやおばあさんが亡くなっても、一緒に暮らしているかどうかで感じ方は全然違いますから。私たちからすれば、身近な人の死を一度も経験しないで、医者や看護師になるというのはちょっと不安ですね。そんなことで、患者さんや家族の気持ちがわかるのだろうか。私たちが不安になるのはいいですけども、だからといって、教員の側から学生に「お前、身近な人の死を一度も経験してないのか。そんなことでお医者になれるか。経験してこい」とはいえないでしょう。これ相当ナンセンスな注文ですよ。要するに「そんなもん、現場で習ったもんですけどな、わはっは」というのは、そういうナンセンスな注文を学生たちに突きつけているということなんです。もう、社会構造が変わってしまった以上は、これを教育で、ある程度補っていかなくちゃいけない時代になってきたというふうに捉えるべきだと思うんです。

これは、少子化とか地域社会の崩壊。例えば、わかりやすい例でいうと、昔、駄菓子屋さんっていうのは、明らかにコミュニケーション能力が高い子の方が得したシステムでしょう。駄菓子屋さんのおばさんと友だちになると、5回に1回はまけてもらえたりできた。でも、今はコンビニで、お金さえあれば、だれでも同じように買える。さらに、これからは、ネットでワンクリックで買えるわけですから。

子どもたちのコミュニケーション能力は上がっているんです。でも、社会の要求はもっと上がっている。しかも、子どもたちの環境は、どんどんコミュニケーションが要らない方へ要らない方へとなっている。もちろん、産業構造の転換、国際化という問題もありますので、さらに、いろいろやっていかなきゃいけないですが、これは端折ります。

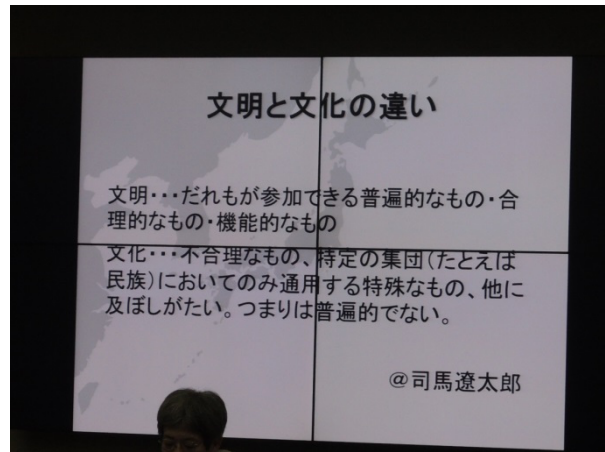
もうひとつの問題がですね、「コミュニケーション能力をめぐるダブルバインド（二重拘束）」です。今の子どもたちには、「グローバル・コミュニケーション・スキル」、「異文化理解能力」が必要であることはわかっている。企業もそういいます。しかし、日本の多くの企業の場合、入社して1週間もすると、別の能力を新入社員に要求します。それが、「日本型のコミュニケーション能力」ですね。例えば「上司の気持ちを察して動け」「会議の空気を読んで意見をいうな」と、全く異なるコマンドが発せられます。こういうの

を、心理学の世界では「ダブルバインド」といいます。これ、わかりやすい例でいいますと、お母さんが子どもを連れて近所に散歩に行き、知り合いに合った時、「うちの子は勉強できないですけど、まあ、子どもは体が丈夫ならね」といっていて、家に帰った途端に、「一体何よ、この成績は。恥ずかしいわね」と。大人は、内と外の使い分けなんで、しょうがないんですが、子どもは区別がつかない。ですから、これが激しく繰り返されると、心理学の用語で「自己喪失感」「操られ感」、まあ、「アイデンティティーの崩壊」ですよ。要するに、自分が何を期待されているかわからなくなってしまっ、自分を見失ってしまう。これが強すぎると、「引きこもり」とか「人格障害」の原因になるのではないかとされています。

家庭の中でさえ、ダブルバインドがきついと、引きこもりになってしまうわけですが、今は、日本の社会全体がこのダブルバインドの状態にあって、コミュニケーション能力、コミュニケーション能力と言いながら、その内実は、この二つに二極分化しているんです。そして、この二つの異なるコミュニケーション能力を、一挙に若者たちに求めているわけです。当然、引きこもりが増えるのは当たり前ですし、内向きになります。

ただですね、ぼくは、ダブルバインドだからダメだと言っているわけではありません。そうではなくて、このダブルバインドは、これからの日本人が背負っていかなきゃいけない十字架のようなものではないか、とぼくは考えています。この極東の島国が、どうにかして国際社会で生きていくために、このダブルバインドを引き受けて、その上でどうするかということを考えていかなきゃいけない。ただ、問題は、100年前だったら、これに悩むのは、夏目漱石とか森鷗外という超エリートだけでよかった。あの天才夏目漱石はロンドンでノイローゼになり、秀才森鷗外が、かのように生きると覚悟を決めて二重生活を送るわけです。しかし、今の若者たちが辛いのは、自分たちが何に苦しめられているかさえわからずに苦しんでいる。そして企業、社会の側は、全く無自覚にこの異なる二つのコマンドを若者たちに突きつけている。ここをちゃんと自覚して乗り越えるってことが、これからの日本社会にとって重要なんじゃないか、ということです。

司馬遼太郎さんが晩年、文明と文化の違いってことを、よく繰り返しおっしゃっています。文明は、だれでも参加できる普遍的、合理的、機能的なもの。文化は不合理なものなんだ、と。つまり、特定の集団、その民族とかにおいてのみ通用する特殊なもの。よく学生に説明しますが、裸だった人間が服を着るようになる。これは文明です。これ合理的ですね。寒いから服を着る、ところが、服それ自体は、和服があったり、チマチョゴリがあったり、スコットランドでは男性でも公式行事ではスカートをはく。似たような気候でも違ったものを着ている。不合理性が入るわけですね。これは文化です。それと、も



う一つ大事なことは、これも、司馬さんがおっしゃっているんですけども、「日本は文化を輸出できても、文明は輸出できる国ではない」ということです。文明を輸出できるのは、巨大な多民族国家やステーツですね。ヨーロッパ文明とかアメリカ文明とかインド文明、中華文明、イスラム文明…というのはあっても、日本文明というのはないですね。要するに、いろんな文化が集まって、おしくらまんじゅうのようにして一つの文明が生まれてくる。文化が単体で文明になることはありえないということなんですね。

ぼくは、京都の前原誠司さんが国交省の大臣だった時に呼ばれて、成長戦略会議の観光部会の座長をしていました。当時、国交省で一番の話題はJALの再建で、航空部会が一番脚光を浴びておりましたが、その横に国際部会というのがあって、そこは、日本の新幹線をどう売っていくかという部会です。それで、JRの関係者とかいろんな方がお見えになるんですが、口を開けば「技術では負けていない」という。一般の人間からすると、「それなら、海外でもっと売れよ」と思うが、なかなか売れない。もうひとつ、震災の後、ぼくは外務省でも諮問委員をやっていて、どうやって、日本のイメージを回復していくかかという話をしていたんですが、そこで、新幹線の優秀性が言われました。「原発は残念だったが、新幹線は、一分以内にすべて停車して死者どころか、けが人さえ出さなかった」—ものすごい技術で、これをアピールしていけばいいじゃないの、というわけです。

でも、ぼくは、ものすごく違和感があった。そんなにすごいのに、では、なぜ売れないのか。これ、よく学生とのディスカッションの題材に使うんですが、まあ、売れない理由でよくいわれるのはオーバースペックであるとか、コストが高いということですね。でも、それだけではないように思います。で、学生には、もし、ドイツやフランスのセールスマンだったら、自国の利益のために、日本の新幹線をどういうふうに貶めるだろう？ と問いかけます。きっと彼らは、「あんなふうには運行できるのは、日本人だからです」というのではないかと、学生にそういつてみるんです。だって、新幹線で東京に行く時とか、5分も遅れると、10分おきぐらいに「3分取り戻しました」と繰り返してアナウンスがあったりしますね。1分、2分の遅れで大変なことになる。こんな遅れで「わあわあ」というような国は日本だけでしょ。高速鉄道を10分間隔で走らせ、「1分、2分の遅れで騒ぐ」というのは日本の文化なんですよ。

「大体時間通りに電車を動かす」、これが文明です。そして文明は、多くの国々に広がる。日本の新幹線の極端なパンクチュアルな運行の仕方は文化です。これを輸出したければ、日本の文化ごと輸出しなきゃいけないということですね。しかし、文化は輸出できるものではないんです。

このことで、日本は一回間違えちゃったんです。日本文化が輸出できると思った。大東亜共栄圏ですね。日本文化のもとに、アジアを治めようとした。そんなことできないんですよ。文明というのは、異なる価値観を乗り越えて、例えば、言語は違うのに、ベトナムも韓国も日本も漢字を使うようになった。これが中華文明です。言語が違うのにみんなアルファベットを使うようになった。みんな世界の若者がジーンズをはくようになった。ナイフやフォークで食事をするようになった。これが文明です。日本はそこまでの力がない。ただし、日本は、世界最強の中堅国家なので、ドイツと並んで、時々、文化を輸出できる国ではないかと錯覚してしまうんですね。あまりにもすばらしい国なんで。多分、昭和17年の初頭ぐらいには、日本とドイツが占領していた地域の面積って、東半球で5分の1ぐらいまで多分あったと思うんです。ある種の帝国を築いた、瞬間的に。でも、日本もドイツも元々資源のない国だから、兵站が間に合わないですね。ロジが間に合わない。だから、進出した先で侵略せざるをえない。収奪せざるをえない。後で非常に大きな禍根を残しましたね。無理なんです。帝国を築けるような国ではない。私たちは、中堅国家としてきちんと誇りを持って生きていく。もうひとつは、今のドイツのようにヨー

ロッパ文明という大きな枠組みに作り変えて、そこから何かを発信していく。ドイツ単体では、もう生き残っていけないわけです。じゃあ、日本はどういう文明社会の中で生きていくのかっていうのが、これからの日本にとって、大きな課題になると考えます。

あるいは、司馬さんはこんなこともおっしゃってる。「ステーツとネーションは違う」と。ちょっと、司馬さんは使い方を間違えているんですけどね。司馬さんがおっしゃってた「ネーション」は「ネーションステーツ=国民国家」のことなんですね。ステーツは、「何かの理念によって集まった集合体」。アメリカがまさにそうです。自由という理念によって集まっている。あるいはフランスも、自由、平等、博愛と。これに対してネーションは自然発生的に作られた。要するに、社会学でいうところの「ゲマインシャフト」か「ゲゼルシャフト」かということです。で、日本は、ぼくは、まだネーションなんだと思うんです。でも、いつまでもネーションではいるわけにはいかないんですよ。これ、やっぱり国を開いていけなくちゃいけないわけですよ。日本に、どのぐらい移民を入れるかということには議論があると思うんです。でも、ゼロということはありません。京大でも阪大でも、アジアから優秀な研究者に来てもらわない限り、日本の大学の未来はないわけです。

それで、最後に「対話と会話を区別する」ことが重要だという話をします。対話は「ダイアログ」で会話は「カンバセーション」で、英語でははっきり違うんですが、日本語ではほとんど意識されてきませんでした。辞書には「対話＝一対一でしゃべること」なんて書いてあります。ぼくなり定義では、会話というのは「親しい人同士のおしゃべり」、対話というのは「知らない人との間の情報の交換とか、知っている同士でも価値観が異なる時のすり合わせ」をいいます。残念ながら、日本はですね、島国、村社会で「会話型」の文化を作ってきた。「分かり合い、察しあう」文化を作ってきた。日本人ならわかるだろう、察してくれるだろうという文化です。一方、ヨーロッパでは、異なる価値観、異なる宗教を持った人間が背中合わせで暮らしているので、自分が何者であり、何を愛し、何を憎み、どんな能力を持って社会に貢献するか、を説明しなければいけない文化です。

これ、文化の違いなので、良し悪しではないし、まして優劣ではない。日本は「分かり合い、察しあう」文化の中で、素晴らしい芸術を生み出してきましたね。例えば俳句とか短歌という、世界で最も短い詩の形を生み出してきました。世界に誇るべきことです。でも、よく、学生たちにもいうんですが、「しかし、世界に出たら、この『分かり合い、察しあう文化』は、残念ながら少数派なんだよ」ということです。少数派であるという認識は必要なんです。

少数派のいい点もあるんです。私が生きているような芸術の世界ですね。私は、毎年、フランスのどっかの国立劇場から依頼されて作品を作るわけですけど、依頼が来るのは、私が日本語を話し、日本文化を背負って作品を書いているからです。私が背負っているものが何もなければ、パリには、世界中からアーティストが集まってくるわけですから、英語の下手なやつ、フランス語もできないダメな奴という扱いですよ。でも、私は彼らの持っていないものを持っていて、しかも、それを、彼らの文脈で説明できる能力を持っているから仕事がきている。だから、今の若者たち、学生たちに必要なのは「分かり合い、察しあう」文化を基盤にしながら、日本文化を捨てないで、どうにかしてそれを説明する能力。日本文化を、どのように世界文明の中に落としこんでいくかという能力が、必要なんだと思います。

会話というのは、言語学の世界ではハイコンテキスト（言語、知識、体験などの共有性が高い）な社会といわれています。これに対して、対話というのはコンテキストが通じにくい社会です。そういう社会の中で、どうやって、これから子どもたちがきちんと他者とコミュニケーションをとっていくかということが、重要で、一番求められているのではないかと考えています。では、時間ですので、こんなこ

とで終わりにいたします。

「感激・感動する新しい広場づくりとコミュニケーション能力」

☆ディスカッション

▽ディスカッサント

堀場雅夫さん（堀場製作所最高顧問）

高田公理さん（佛教大学社会学部教授）

山極寿一さん（京都大学大学院理学研究科教授）

山口栄一さん（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）

○ ○ ○

平田 オリザさん（劇作家 演出家 大阪大学教授）

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）



平田さん、ありがとうございました。大変内容の濃い、教育、子どもたちのコミュニケーション、そして、世界に向かって日本文化、日本人はどうしていったらいいかなど、かなり広い題材を駆け抜けていただいたと思います。これからの討議に、テーマは事欠かないんですが、どういうふうに討論して行ったらいいか、難しいなあと感じております。それです、平田さんが最初におっしゃった、今の若者たちの話、若者たちのコミュニケーション、そして私たちが直面しているコミュニケーションの問題と世界、

というようなところから進めていったらと思います。

私は、京都大学の理学部で教員をしております、2年前にですね、ここに心理療法士を入れて「学生相談室」というのをつくり、理学部学生の悩みを聞くことを始めたんです。引きこもりが多かったり、あるいはコミュニケーション不足で悩んでいる学生が多いと聞いたりしたものですから、そういうシステムを設けたわけです。そうしたらですね、学生相談室の先生は京都大学の教育学部を出ていますが、でも、「理学部の学生は大変特殊ですよ」という。何が特殊なのかと聞くと、自分が経験してきた相談は、他の人とのトラブルが多かったが、理学部の学生は「大学に入ったら友だちができると思っていたけれども、友だちができない」ことが悩みなんだという。「友だちを作るには、どうしたらいいか」という、考えてもいなかった指導をしなければならなくなった、とおっしゃるんですね。その先生は一計を案じて、そういう悩みを持った学生を集め、何と京都市動物園に連れていかれたそうです。その結果、動物を見て、何とか、会話も弾み友だちができたということでしたが、とにかく、これが大学生の悩みかと、びっくりされたそうですが、そういうのが、今の学生の現状だな、と。

平田さんも、おっしゃるように、中、高と、すごく学問に精を出してきたんでしょけれども、母親とかの会話しかなく、学校に行ってもひたすら机に向かうだけの人生を歩んできた子たちが、大学に入ってきて、突然放り出されてしまう。学年も違えば、出身も違う。趣味も違う人たちと会話しなくちゃいけない。さて、自分はどういう話をしたらいいのか、ということでまず悩んでしまう。こういうことが今、日本の社会で起きてるわけですね。特に、エリートの社会です。ちょっと、ぼくはびっくりし

ました。これで、たった4年間で社会に出なければならぬわけですから、ほんとうに、大丈夫かっていう気がしました。

その時に思い出したのは、私の師匠で今西錦司という、もう亡くなられた偉い霊長類学、生態学の先生のことなんですけども、ご存知のように、京大山岳部、学士山岳会（AACK）で活躍された登山家としてもよく知られた方なんです。今西さんは、山登りに関係する名言をたくさん残しておられますが、そのひとつに「鉄の団結、紙の人情」という言葉があります。これ、どういうことかっていうと、いうなれば「ゲマインシャフト」じゃないんですよ。「ゲゼルシャフト」でいこうってことです。つまり、あんまり義理人情ばかりを当てにして人と組むと、ろくなことが起こらない。初めからあまり信用せずに、ちょっと距離を置いて、ただし、目的のためには団結をすると。つまり、一歩間違えば、岩壁から落ちて命を失ってしまいますし、ザイルでつながっているわけだから自分も巻き添えを食うわけですね。そういう、命をザイルにかけた仲間であっても、これは人情ではないんだと、しっかり頭に叩き込んで山に登れ、そういうことをおっしゃったんだと思います。

これ、今、平田さんがおっしゃったことと少し似てるかな、と思います。つまり、信頼ってというのは、あんまりベタベタになると、ろくな結果にならない。ちょっと距離を置いて、相手と違うんだってことを頭の中にきちんと入れながら、付き合うことが必要なんだということを、今西さんもおっしゃったような気がします。そういう人との付き合い方っていうのが、昔は常識としてあったんだろうし、戒めとしても、みなさん、わかっていたんだろうと思うんですね。それを、体感覚でどうやって理解するかが、重要な課題なのかなっていう気がいたしました。

「伝えたいという気持ち」は、「伝わらない経験」から起こるんだということを平田さんはおっしゃった。ただ、今の若い人たちを見ているとね、ブログとかツイッターとか、非常に盛んにやりますよね。ですから、自分で伝えたいって気持ちは、むしろ強く持っているんじゃないか。でも、その、伝えるというコミュニケーションの形式が違ってきましたから、昔の、そういうメディアがない時代の伝えたいという気持ち、表現と、今の時代のそれとで大きな乖離があるような気がしているんです。それについてはどういうふうにお考えになっているんでしょうか。

平田オリザ（劇作家 演出家 大阪大学大学院コミュニケーションセンター教授）



10年ほど前に、NHKが比較的大きな調査を小学校の先生方にしたことがあって、これ、「話し言葉」に関する調査だったんですが、その時、多数を占めたのが「今の子どもたちは、しゃべりは大好きなんだけど、話し合いが下手」というものだったそうなんです。要するに、チャットとかラインとかツイッターでさえも、おしゃべりであって対話ではないんですね。実は、特にツイッターとかブログってのは、本来は、対話の場であって、だから、今年（2013年）話題になったコンビにとかの冷蔵庫にはいっちゃうとかありましたが、あの一連のことは、対話の場ということをわきまえずに、仲間内のノリでやってしまったことが問題になったわけでしょう。だから、若者たちは、あれは、会話感覚で使ってるんで、おしゃべりなんです。友だちには、すごく伝えたいんです。だけど、他者とはコミュニケーションをとりたくないんですよ、面倒くさいから。

確かに他者とコミュニケーション取るのは、すごく面倒なことなんです。だけど、だからこそ、

伝わった時に喜びが大きいと思うんですよ。よく学生にいうんですが、英語の通じない国に行って、私たちの世代なら、レストランで6カ国語会話帳なんかを開いてどうにかしてメニューから注文し、まあまあ、自分が思ったものに近いのが出た時の喜び。また、逆に、全然違うものが出てきても、それが意外と美味しかった時の喜びとか、あるんですね。そういう面倒くささに耐える力、をつけていかなきゃいけないと思うんですね。それで、ただ喋りゃいいってことではなくって、ただ喋る、うちうちだったらいくらでも喋れるんです、今の子は。だから、内と外っていうのをきちんと教育の現場では分けて、外に向けてどのように対話力をつけていってかかってことが、一番課題だと思うんですね。これが一つ。

それからメディアの問題はですね、きょうは社会学の先生がいらっしゃいますので、私が言うことでもないんですけど、基本的に新しいメディアが出てきたからといって、それで、コミュニケーションの本質が変わってことはないというふうに、よくいわれるわけですよ。これも、学生たちに説明するのは、ぼくたちの世代は、長電話をするなといわれた世代ですよ。電話は家に1台、今でいう「家電」しかなかったので、長電話は、実際家の人が困ったんですが、「何でも電話で済ませて…、手紙を書きなさい」と言われてたものでした。ところが、逆に今は、メールを書いていると怒られて「ちゃんと肉声で伝えなさい」と。これどっちだよということです。ことほど左様に、大人というのは、自分が育ったコミュニケーションツールを中心に考えるから、そんなものは非常にナンセンスであって、新しい時代には新しいツールが出てきて、いろいろ淘汰されながら落ち着いていくわけですね。今、確かにラインというのは問題で、子どもたちが、ずっと学校での人間関係を24時間引きずらなきゃいけないので問題ですが、きっと落とし所に落ち着いてきますよ。ヒステリックになることはないと思います。新しいメディアが出てきた時には、犯罪に悪用されたりすることが必ず起こるので、そういうところをしっかりと見ていってあげることと、コミュニケーション教育みたいなものをちょっと切り分けて考えないと、感情的な議論になってしまうと思いますね。

堀場 雅夫（堀場製作所最高顧問）



ことを、つくづく思いました。

平田さんのお話でなるほどと思ったのは、日本の新幹線のことで。常々、あんなにすごいのに、どうしてもっと世界中の人は感激しないかと考えていたんです。これ、まさに、うちの会社も同じで、何でこんな優秀な分析機を作っているのにね、もっと、お客は感激すべきなのに、売ってる先のレベルが、ちょっと低い違うかと、常に言うてたんですが、まさにこれは、オーバースペックというようなレベルではなく、はあ、これは、なるほど日本の文化やなあて

ことを、つくづく思いました。私のところには、フランスの子会社がありましてね、ここは非常に優秀なものを作っているんですが、故障率が高いんですね。それで、常に、この故障率はなんやということをいうんですが、どうも、彼らは、故障するということが、われわれの感覚と違うんですね。社員を通じて間接的に聞いたことですが、故障することによって、お客はこの機械の存在を常に認めるんだ、といっているようなんですね。全然故障しなかったら、「HORIBA」だろうが何だろうが、動くのが当たり前になって、どこの機械という存在価値が認められない。しかし、時々、具合が悪くなるから、常にその存在が気になるんだと。そやから、これ、ヨメさんに似てるんですね。喧嘩してはじめてヨメさんの存在があるみたいなどころもあるので…。と、これはさておき、まさに、フランス、日本の文化の違い。平田先生のお話を聞いて

て、何やあいつらは、ホンマに価値観がないやつや、と思うことが多かったんですが、なるほど「文化の違い」、といわれると、そういうもんなんやなと、フランスもまんざらやないいう気持ちがしました。

山極

すごく面白いところを突いてこられたなと思いますが、文化の違いというのは、今おっしゃったような、新幹線の時間差にどのぐらい神経質になるかというのがあるようですが、コミュニケーション能力にも現れますか。

平田

そうですね、じゃ、まず新幹線の話からしましょうね。ご存知の方も多いと思いますが、今、スペインやイタリアの高速鉄道はすごく優秀なんです。ただね、面白いのが、行った方は経験されたかもしれないですけど、スペインやイタリアの高速鉄道って、3、4分早く着いちゃうんです。てことは、時刻表がちょっと遅目に設定されているんです。日本では、そんなことありえないでしょう。あの頻度で、そんなことがあったら困りますよね。ただ、早くつくつと、なんとなく嬉しいですけどね。



それと、さらにいうと、これもご存知の方が多と思うんですけど、日本の新幹線が売れないのは、安全基準を満たしていないんですよね。要するに、事故、衝突事故が起こらない前提でできているんです。震災には強いですが。見れば一目瞭然ですね。フランスやドイツの高速鉄道は、ごっついじゃないですか。もちろん、動かし方が、新幹線は全車両で動かすのに対して、ヨーロッパの高速鉄道は機関車で引っ張り、先頭車両に乗客は乗らないのですね。とにかく、衝突した時のことを考えて、ものすごく頑丈で重い。全然、設計思想が違うわけですね。

ただ、フランスやドイツのセールスマンだったら、こういうふうについてきますよね。「確かに、新幹線は事故が起こらないようにできてます。優秀で、50年、60年、事故ゼロです。死者ゼロです。でも、福島原発は、原発事故が起こらない設計思想でやって、事故を起こしたじゃないですか。新幹線も事故起こすかもしれません」と。こう言われた時、日本のセールスマンはしんどいんじゃないですか。でも、こりやもう、思想の問題なんで、ぼくも日本人だから、日本で暮らしてる間は、この1分1秒を大事にする感覚ってのはすごく心地いいんですね。それはまさにネーションなんです。ネーションってのは、そこにいる人々にとっては、すごく心地いいんですよ。でも、一歩外にでると、それを同じように心地いいと思ってくれるかどうかは、わからないってことなんですね。

コミュニケーションの問題も同じで、要するに、相手が自分と同じとは限らないってことを前提にコミュニケーションをとるのか、相手も大体自分と同じように思ってくれるだろうということを前提にしてコミュニケーションをとるのかってのが、欧米と日本のコミュニケーションの姿の一番の違いなんですね。

山極

よく携帯でトラブルを起こすっていうのがありますが、要するに、相手と自分とが常に一緒になって

会話をしてないとたまらなくて、ちょっと狂ってくるともう何かイライラしてしまう。こういうのは、欧米ではあまり起こらないトラブルらしいですね。

平田

ええ、これも不思議なことで、アメリカのほうが訴訟社会なはずなのに、ネット上の訴訟とかは、人口比でいうと日本の方が多いとされているんです。ひとつには、これ、言語の問題もあって、日本はアクセントと助詞、助動詞で、気持ちを伝えるんですね。これ、言語学的にいうと表意語句って言って、話し言葉だとニュアンスが伝わりやすいんですけど、向こうは、基本的に動詞と名詞の組み合わせで気持ちを伝えるので、話し言葉でも書き言葉でも、誤解が起きにくいように、起きにくいようになっている言語なんです。特に英語はそうなんです。それは、多民族の中でもまれてきたから、民族の違いを越えて誤解が起きにくいように起きにくいように英語は発達してきたわけで、だから味気ないんですよ。ただ、意味は取りやすい言語なんです。

日本語は、ほんとにニュアンスに頼る部分が多すぎるから、だから、別の例もあるんです。あの顔文字ってあるでしょう。若い子たちがよく使う。携帯とかに入ってますね。あれも、アメリカで生まれたんだけど、爆発的に日本で発達したんです。なんでかという、顔文字がニュアンスを補ってるんです。例えば、「ノート貸して」だけだと、ちょっときついから、そこに m()m (ペコリ) みたいなものを入れる。話し言葉だとニュアンスが補えるが、文章だけだと、日本語はきつくなっちゃうから、顔文字を入れたりすることで曖昧さを補ってるところがあるんですね。どの言語学者もいっていることですが、将来的には、30年、50年すると、日本語も、もうちょっと主語や目的語をはっきりさせる方向に変化するだろうとされています。特に、敬語とかがどんどん、フラットになっていくので、すると誰が誰に言っているのかわからなくなっちゃうんですね、日本語の場合。それで、やっぱり、目的語とか補っていかなくちゃいけないように変化するだろうと。

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）



とても心地よいお話が聞けたので、逆に議論のつかかりが見当たりません。でも、あえて議論を持ち上げるとすると、たぶん最後の司馬遼太郎さんの話かなと思って、そこから出発したいと思います。

「日本は文化を輸出できても、文明を輸出できる国ではない」というくだりです。そして「ドイツも、日本と同じではないか」というお話もありました。でも、ドイツはやっぱり、明らかに文明をつくったと、ぼくは思うんですね。というのは、科学というのは、文明です。文明の中でも、

最も普遍的なものです。19世紀の半ばから、ナチスが政権をとる1933年までにできあがった科学を、いまぼくらは一生懸命勉強しています。あのころに相対性理論も生まれ、量子力学も生まれ、あれで、ほんとに世界がわかりました。それらのほとんどを、ドイツ語圏の人々が作りましたでしょう。

では、日本は文明を輸出できる国ではないとすると、科学をつくれぬ国であるということになってしまう。「日本は今でも辺境にある。文明を作れない国だから」という考え方は、内田樹さんの「辺境論」に通じると思います。

しかし、日本は戦後、物性物理学、つまり物質の科学が特異的に発達しました。だから、それを土台にして半導体をはじめとする新物質の産業が生まれました。そのころ物性物理学や物質科学にいた科学者たちは、自分たちこそが世界のイニシアチブを握っていることに気がついて、世界に向けてみずからの独創を教えていました。世界中から人がやってきました。私は、そういう文化の中で育ちましたから、日本こそが物性物理学という文明を輸出できる国だと思っておりました。しかし社会科学の世界に入ってみると、そこは旧態依然としたキャッチアップ型でした。物理の世界では、イニシアチブを持っているので、対等に批判しあえます。ところが、社会科学の世界では、誰かの批判をすると、「批判なんかとんでもない。もう、教えてもらえばっかりです」とへりくだってしまう。辺境国の感覚が出てくる。ぼく、これ、ある意味で「教育の失敗」だろうと思うんです。

そこでぼくは、やっぱり、現代物理学を一手に創り上げた19世紀後半から1933年までのドイツが何をしてきたんだろうということをもう一度学び直して、戦後、物性物理や物質科学で世界のイニシアチブをとってきた日本をもう一度見直すべきかな、と思うんですね…。平田さん、いかがでしょう。

と

平田

あ、う、司馬さんが、日本の文化と文明について、特に晩年繰り返しおっしゃっていたのは、それ、ぼくは、バブルのことがあったんだと思うんですね。司馬さんは、バブルってのを、ものすごく憎んでいらっしやったから。

そのバブルで、ソニーの「ウォークマン」というのが一番象徴的だと思うんですけど、あれは、世界中の若者たちがイヤホンを通じて音楽を聞くというふうに、ライフスタイルまで変えてしまった。それは、ある意味で、「文明の輸出」だった。すごく大雑把な議論をしているので、そういう事象は起こると思います。でも、結局のヘゲモニーは今、「iPhone（アイフォン）」、アップルが握っているわけですよ。で、そこは、錯覚があったと思うんです。繰り返しになりますけど、日本は、とても素晴らしい技術力を持っていて、とても高度な教育を受けた国民がそろっていて、そういうことが瞬間的にできる国なんですよ。

今、話題になってますけど、昭和15、16年の時点で、零式戦闘機（ゼロ戦）は、確かに世界一の技術を持っていて圧倒的に強かったですよね。でも、圧倒的に強かったのに、17年以降は、ガンガン撃ち落とされますね。ご存じの方も多いと思いますが、アメリカがつくった「対ゼロ戦のマニュアル」、いくつかありますが、基本的には一つです。「2機で当たれ」。それで落とされちゃうんです。物量の前。しかも、ゼロ戦は新幹線と似ていて、要するに、まあ、当時は、他の国のもそうだったといわれていますが、非常に防御が弱い。これで、軽量化を図った。圧倒的に強くて一対一では絶対に負けないから、防御する必要はなかったわけですよ。それが、やっぱり文化なんだと思うんですよ。でも、最終的には文明の前に屈してしまう。で、それは、もうちょっと私たちの国は、今、おっしゃったように、まさにユニークネスで勝負すべきだと思うんですよ。ヘゲモニーを握るのではなくて、ユニークネスで勝負すべきだろう。

それから、ドイツのことですが、専門的な科学の話はわからないんですけどね、例えば、小林秀雄さんが西田幾多郎について、「日本語のようで日本語でない奇怪なシステム」というふうに書いているんですね。多分その前段で「カントにおけるドイツ民族」とか「パスカルにおけるフランス民族」というのを論じていて、つまり、「西田は読者を想定していないんじゃないか、全く無国籍な文章になってしまっている」といっている。要するにヨーロッパ文明っていうのは、例えばカントは、別にドイツに住

んでいたわけではないですよ。今の「エラスムス計画」はまさにそうだけれども、ラテン語を中心として大きな流れがあって、その中で出てきたものですね。だから、それをドイツ文明と考えるのかヨーロッパ文明と考えるかってのは、もちろん評価が分かれるし、どこで切り取るか、非常に相対的な部分もあると思いますけど、ぼくのきょうの文脈でいうと、それはヨーロッパ文明なんだと思って話をしました。

山極

一気に、文明と文化の話にいつてしまいましたけど、高田さんいかがですか。

高田 公理（佛教大学社会学部教授）



文化と文明の話に関して、科学は普遍的なものだとおっしゃったのですが、本当にそうなんでしょうか。ぼくには、そういう意味での科学が、非常に傍迷惑な役割を果たす場合があるように思えるのですが……。

例えば、アメリカという多民族社会では、科学の普遍性が高く評価され、同時に非常に発達しめるのですが、ときに困ったテーマが普遍性をもって語られる。卑近なところでは、「7時間睡眠がベストだ」といった言説も、そうした事例の一つです。

それで、それ以上でも以下でも死亡率が高まるんだというわけでしょう？

でも、イヌイトの人々なんかの住んでいる北極圏では、夏は昼が長いし、冬は夜が長い。当然それに対応して睡眠時間も夏は短くなり、冬は長くなる。そういう条件のもとで生きている人々と、中緯度地帯で近代化した社会に生きている人々を、十把ひとからげにして扱う科学的な医学などを見ていると、本当にそれでいいのかと思ってしまうわけです。

睡眠だけではなくて、食べ物だって、地域ごとに異ならざるをえません。それを近代科学の普遍性で、絨毯爆撃のように差配される文明の形というのは、かなり辛いなあと思えるのですが、いかがでしょうか。

いまひとつ、普遍的なコミュニケーション能力は存在しない、というふうにおっしゃったわけですが、そのことを強く実感したことがあります。それは阪神大震災のあとに始まった「FM COCOLO」の番組を聴いていたときのことです。この局の番組では、タイ語やインドネシア語などが使われるようになったのですが、それがぼくの耳には、ある種の音楽のように快く聞こえたわけです。むしろ、話されている内容は皆目理解できません。でも、聞き流していると、非常に心地いい。そんな感じを持ったわけです。

そうした感じが非常に強かったにもかかわらず、その意味はまったく分からない。つまり異文化というものは本来、非常に理解するのがむづかしいという前提で付き合うべきなんではないか。そんなことを教えられたわけです。

これを一般化すれば、文字通り普遍的なコミュニケーション能力は存在しないということになります。同時に、今は普遍的だと思われている科学だって、いくらでも変化しうる。という意味で近代の欧米で発達した科学の普遍性は、いわば私たち現代人の幻想に支えられているのではないか。平田さんの話を聞きながら、そんなことを考えていました。

ただ他方で、人間の体には、ある種の見事な普遍性が備わっている。というのは、演劇的なコミュニ

ケーションにかかわる話を聞きながら考えたことです。

具体的にいうと、東京ディズニーランドがアルバイトの若者に対して行なう教育方法を思い出していました。つまり、ディズニーランドでアルバイトしたいという若者が多いのは、「お行儀を教えてください」からなんですね。

どんなことかという、ディズニーランドではアルバイトの学生たちに、例えば、こんな事を教えます。

「あなたが、ビジターの子供さんに何かを問われたら、その瞬間、必ず跪きなさい」

で、実際にそうした態度を取ると、本人の視線が子供の視線と同じ高さになります。すると子供は、自分よりずっと大きなアルバイトの兄ちゃん姉ちゃんを、こわい存在ではなくて、仲間だと思ってくれる。で、彼らに馴染んでくれるというか、親しみを持ってくれる。すると、その気持ちが伝わってアルバイトの兄ちゃん姉ちゃんも嬉しくなる。そして気づかぬうちに子供たちと容易に親しめる気持ちのありようを身に着けるわけです。

さらにディズニーランドのアトラクションの場合、舞台上に立ってパフォーマンスを展開する若者たちが、慣れてきて妙に上手になると、辞めさせるのだそうです。

「初心を忘れたパフォーマンスは、見る人を感動させない」

ディズニーランドの経営者は、こう考えているようです。

こんなことを思い出すと、科学の普遍性だけでは、何も伝わらない。それは一種の幻想なのかもしれないと思ったりするわけです。そういう意味で、必ずしも「文明を輸出できる国が偉い」とも言えないような気がします。そんなことを考えていました。

山口

ぼくの言っている科学というのは、できあがったものを意味していないんです。作るプロセスを意味しています。夜のサイエンス。こんなすごいことをどうやって考えついたんだろうという、その過程なんです。科学は、できあがっちゃうと、もうパラダイムになっちゃってつまんない。教科書に書かれてしまったものは、どうでもいいんです。そうではなくて、肝心なのは、ほかならぬこの人間が、何でこんなことを思いついたんだっていう、その発想なんですね。それを議論したい。それが、ある種普遍性を持っていて、それこそが文明的なんだと思うんです。その、固有の文化ではなくて、人間が何でこんなこと思いつくんだよ、と。そこでは、芸術と科学とが同じ創造性を持っている。それを問いたいと思っているんです。

山極

もうひとつ、平田さんにお聞きしたいんですけど、よく、今の若い人たちは内向きだっていますよね。私は、言語というものを作り出してから人間は、物語を生きるということに熱中し始めた。他人の物語を理解し、他人の物語を楽しむということが、結構できていたと思うんです。今、内向きなものは、自分の物語も他人の物語も見つけれないでいるのではないかと。演劇というのは、そういった物語というものを一フィクションですけど一作ってくれる。そういうところに自分を巻き込んでくれるっていう、すごく大きな効果があって、ああこういうものなんだっていう、つまり自分の中の物語性ってものに気づき、それを表現する方法に目覚めることを、させてくれるんじゃないかと思うんですけど、どうでしょう。

平田

ぼくは、よく不登校の子どもたちと付き合うんですけど、不登校ってのは、中学1年生でなる子が一番多く、それまで「いい子」だった子、社会的にいい子だった子が多いんですね。だから、親のショックも大きいですけど。その子たちは、判で押したように「いい子を演じるのに疲れた」と言うんですね。ま、ぼくは演劇人なんで「本気で演じたこともなくせに、演技に疲れたなんていうな」ってからかうんですけど、で、もうひとつ、彼らがいうのは「ホントの自分はこのじゃない」ってことです。ぼくは、しょうことなしに「ホントの自分なんか見つけたら、大変なことになっちゃうよ。新興宗教の教祖になってしまう」と、よくからかうんです。大人は、夫という役割とか、父親、会社員、マンションの管理組合、PTAの役員とか、社会的な役割をいろいろ演じ分けながら、かろうじて人生の時間を前に進めていると思うんですけど、子どもには、すぐ、「ホントの自分を見つけなさい」というんですよ。

よくそれを、私たちは「タマネギの皮」に喩えるわけです。たぶんこれ、村上陽一郎先生が最初に言い出されたことなんですけど、タマネギというのはどっからが皮でどっからがタマネギということはなく、人間はそういうものなんじゃないのか。こういうのを、まあ、演劇や心理学の世界では「ペルソナ」というわけなんですけど、ペルソナってのはパースンの語源で、「人格」という意味と「仮面」という意味を兼ね備えているわけですね。私たち、いろんな仮面をかぶっていて、その総体が人格を形成している。

この、不登校の子どもたちが「いい子を演じるのに疲れた」という問題は、10年以上ずーっと、いろんなところに言ってきたんですけど、その中で一番ショックを受けたのが、秋葉原の連続殺傷事件の加藤（智大）被告がですね、犯行の直前にケータイサイトの掲示板に「いい子を演じさせられるのに疲れた」と書いていたことなんです。演じさせられるのに疲れた」って、ぼく、ちょっとびっくりしましたね。そういう日本語が成立するのかとさえ思いました。だって、演じるって主体的な行為で、演じさせられてるって、誰にさせられているのか、なんという操られ感、なんという自己喪失感…。まあ、みなさんご存知の方も多いと思いますが、彼の場合、親も高学歴で、お母さんは青森高校なんです。この高校は、弘前大学に入るよりは難しいっていわれるほどのナンバースクールです。高学歴の家庭のほうが、ダブルバインドは起きやすいです。こっからは、私の、劇作家としての想像ですけども、恐らく子どものうちから、「いいよ、いいよ、もう勉強なんかしないで。自分の好きなこと見つけなさい。お母さんも勉強しないで青森高校に入ったからね」と。これ、一番きついでしょ、子どもに。「えっ、どっちだよ。やっぱ、入んなきゃいけないじゃん、結局」ってわけで、典型的なダブルバインドですよ。

要するに問題は、その、日本では、演じるってのが、何か、自分を偽るとか嘘をつくみたいなマイナスのイメージで、ちょっと捉えられちゃうところがあるんですけど、英語ではプレイですから、楽しいことなわけですよ。で、その、演じることが悪いんじゃないで、演じさせられていると感じた瞬間に、仮面が重くなってしまって体が傾いて、こう、人格障害とかになっちゃうんじゃないかと思うんですね。だから、その、演じわけるってことの楽しさを、子どものうちから伝えたいなっていうのが、まず一つあります。



それから、よく山極さんの話をあっちこっちでいうだけけれども、あの、ゴリラですね。ゴリラも演じるわけでしょう、お父さんになるとね。これ、よくお書きになってますよね。要するに、ニホンザルのような下等なサルだと、エサを前にすると、ボスザルでも子どもとエサの取り合いをするが、父親のゴリラは、えっと、分け与えるんですけど、あ、そうそう、我慢するんですね。とにかく、本能とは違う行動をとるということで、これ、父親になった瞬間から、そうなるんで、これは明らかに演じているだろうと、山極さんから直接伺ったことですが、でも、演じ分けはできないんですね。演じ分けられるのは人間だけです。これ、なんでかという、人間だけが、最低限、「家族」という単位と「群れ・社会」という両方に所属しているからですよ。厳密に言うと、これ、山極さんを前にしてこんなことをいうのは、あれですけど、ゲラダヒヒというコミュニケーション能力のある特殊なサルがいて、ぼく、河合雅雄先生から直接、鳴き声までうかがったことがあるんですが、このヒヒは家族と群れの両方の単位に所属するらしい。それと、マントヒヒの一部にある。

要するに、私たち、この演じ分けるといって能力を持って、この複雑な社会を構成している。あるいは、この複雑な社会が、私たちにこういう特殊なコミュニケーション能力を植えつけたって言うふうに言えると思うんです。だから、演じ分けるといって能力は、人間を人間たらしめているもっとも重要な能力の一つだと思ってるんですね。この機能が壊れ始めてるとしたら、それはちょっと危ない状況かなってところはあります。この演じ分けの楽しさみたいなものが、少しでも教育の中で補ってあげればいってふに考えて、今、ぼくはいろんな活動しているところなんですね。

山極

では、フロアの方からも意見をいただいて、議論を深めてまいりましょう。村瀬さんどうぞ。

村瀬 雅俊（京都大学基礎物理学研究所准教授）



一番印象に残っていますのは、A、B、C、D、E、いろいろお子さんがユニークな発言をするが、それより、大事なのはまとめ役だというお話です。それって、編集能力ですね。なにか、その、モノをつかむんじゃなくて、違うものをこねるといって、それは、なにか創造の瞬間のような気がして、すごく面白かったんですけど、何かもう少し、関連したお話があれば伺いたいのですが。

平田

多分、先生方も、みなさん学生に向かってそう言っていると思うんですけど、普通、私たちってのは、何か、特に過去に体験したものとかを組み合わせながら新しいものを生み出しているって、ゼロから生み出すってことは実際にはありえないわけで、だからこそ、長期記憶ってのが一番大事になってきますよね。で、それはどこから生まれてくるのかわからないので、ま、有名な例は、ビル・ゲイツが大学を中退して、何かふらふらしてた時に、カリギュラフィの授業を取って、それが、後々「フォント」という考え方に結びついたというエピソード。このケースみたいなことが重要なんだ、ということは学生にはよくいっています。とにかく、いろんなことをやっておくしかないんだよ、と。そのいろんなことの組み合わせによって、新しいものが生まれてくるってことは、特に、芸術の世界は、まさにそう

なので。あの、芸術って、ゼロから生み見だすように思われるんですけど、芸術こそが、もう、人類のあらゆる蓄積の組み合わせなんです。もう、出尽くしたと思ったところから新しいものが生まれてくるので、そういう意味では、これから、長期記憶の教育をどうやって行っていくかってことが、ま、一つ大きな課題で、そういう点でも、アートと教育の結びつきがこれから重要になっていくと思います。

村瀬

今のお話、まさに、山口さんが最後にいわれた「創造のプロセス」、それに何か文明的な普遍性が加わるっていう、まさにその点に集約しそうな気がしますけども。

平田

文明と文化との違いというのは、大変大雑把な理論で、先ほども申し上げたように、一個人としては普遍的なものを創りたいんです。あのう、シェークスピア、チャーホフとまではいかないまでも、テネシー・ウィリアムズとか、そのぐらいの仕事は残したいと思って、今、仕事をしているんですね。

ただ、そうはいつでも、特に芸術というのは、文化的な背景ってのがあるわけですよ。ぼくが、フランスで仕事をするようになってから、もう 15 年になりますけど、仕事を始めたころ、すごくよく、新聞のインタビューで「なんで、お前の作品はこんなに三島由紀夫と違うんだ」って聞かれたのです。そんなこといわれても、しょうがない。作家ごとに違うんで。まあ、冗談で「三島先生との共通点は、背が低いことだけ」といったものでした。「ぼくのほうが 3 割低いんだ」、と威張ってたんですけど…。それはさておき、実際に、その時説明したのは、要するに三島由紀夫というのは、日本の文学者がヨーロッパに追いつき、追い越せとって、100 年間頑張ってきた、その結晶のような存在で、ほんとにその作品は素晴らしいんですね。ものすごい論理性があるんですよ。特に三島さんの戯曲ってのは、ヨーロッパ人でもこんなに論理的に話さないだろうっていうぐらい、こうきちんと論理的に組み立てられているんです。だから、海外でも、あれだけ上演されるんです。要するに、1960 年代において、三島文学ってのは、最もわかりやすい日本だったんですよ。内容はジャパネスクで、コミュニケーションの仕方が完全にヨーロッパ、欧米だったんです。それで、逆に、私たち、日本の演劇人から見ると「いや、こんなふうには日本人しゃべれないよなあ」といつも思っちゃうんですね。だから、日本での上演が少ないんです。ちょっと、下世話な話ですけど、三島さんの作品は、遺族の方が厳しく、まだ著作権も切れてないんで、書きなおしたりできないんですよ。そうすると、あの文体のままでやると、ものすごく、日本の俳優では無理なんです。ところが、英語訳されたり、フランス語に訳されるとしゃべりやすい。しっくりくる。彼は、恐らく、半分ぐらい英語で考えていたんじゃないか、と思うぐらいに、ヨーロッパ型の論理構築でなされているんですね。

ぼくのお芝居ってのは、よく俳句みたいだっていわれるんですけど、ポツ、ポツ、ポツっていういろんなトピックが出てきて、全然論理的につながっていかないんだけど、全体が、ある種の世界観を構築するようなスタイルなんですね。ところがですね、内容はですね、例えば、さっきスライドで見ていただいた「東京ノート」っていうのは、美術館が舞台になっていて、フェルメールの話とかが出てくるんですけど、実際に、アメリカ公演をした時に、アメリカのお客さんから「何で、日本人なのにヨーロッパの画家の話ばかりしているんだ」と質問受けたんです。「いや、いや、私たち日本人は、別に、ふだん着物を着ているわけでもないし、浮世絵見ているわけでもなくて…。だって、みなさんだって、そうでしょう、好きな画家といわれて北斎とか歌麿という人のほうが珍しくて、ゴーギャンとかゴッホと

かいうわけでしょう。

要するに、三島さんと私では、あの、コンテンツ、内容と形式がクロスしていることがわかると思います。三島さんは、形式がヨーロッパで内容がジャパネスクなんです。私のは、形式が日本的で内容はグローバル。で、今の時代は、どっちかという私の方に近いんだと思うんですね。よく、欧米の新聞記者たちにいうのは、要するにもうコンテンツは全部いっしょになっていいよ、と。オレは、それはもういいよと。ジャパネスクにはこだわらない、と。もうそれで勝負する時代でもないんです。でも、世界中の人が、コーラを飲み、ハンバーガーを食べようになっても、その食べ方や飲み方は、まだ100年や200年は違うんですよ、と。で、例えば、ボスニア・ヘルツェゴビナの紛争の時に、ヨーロッパ人が何にショックを受けたかという、サラエボの人々は、週末はウィーンにオペラを観に行くような、完全に西洋的な生活をしてたわけですね。でも、祈り方だけが違った。神さえ同じなのに祈り方が違った。ところが、グローバリズムというのは、そういうものを無視して、ローラーでならすように平坦にしていっちゃいますね。

その時に、私たち芸術家の仕事は、特に、日本のような辺境で生きる芸術家の仕事は、「いやいや、ちょっと待ってください。あんたたち、全部一色に塗りつぶそうとしているけど、私たちちょっと違いますよ」って異議申立てをする、小さな差異を示すっていうことが、日本の芸術家、日本の作家である私が世界に貢献する最も重要な部分だと思っています。

そこは、議論が残ると思います。そんなこといったら、日本からシェークスピアやチャーホフはいつまで経っても出ないじゃないか、と。でもね、違うんです。新しい芸術は、必ず辺境から出てくるんです。なぜなら、17世紀において、イギリスはヨーロッパ文明の辺境だったでしょう。イプセン、チャーホフ、ノルウエーとかロシアってのは、19世紀においてヨーロッパ文明の辺境なんです。辺境がどんどん広がっているから、今、日本が辺境で、一番有利な立場にある、芸術家にとって。「ちょっと違いますよ」と一番言いやすい立場にある。でも、全くの辺境だったら、まったく違っていたら、これダメなんですけど、ぼくたちは完全に西洋的な生活をしていて、しかも、常に違和感を感じています。この違和感を表現するだけで、十分、芸術家としては勝負になるってのが、今の私の立場です。

村瀬

アリエティという人が「創造の産物はすごく創造的なんだけど、創造の過程はすごく陳腐だ」と言ってるんですけど、まさに、繰り返しになりますが、創るプロセスは、ものすごく普遍なんです。でも、出てくるのが、飛行機だったり、新幹線だったり、演劇だったり…。だから、その、プロセスだけ見ると、ものすごく普遍の原理が見えてくるんじゃないかなと思って…。

山極

私の方から一つお聞きしたいんですけど、平田さんのやっている演劇は、必ず体の動きというか、視覚的なイメージがつきまとうわけですね。例えば、小説だとか、言葉だけで作られたもの。あるいは、声に出して朗読だけで空間を演劇化することがありますよね。それらと演劇は大きく違うんだらうと思うんです。ただし、論理性っていう点では、言語に近いところでやってらっしゃると思うんですけど、平田さんが、コミュニケーションとして演劇で目指しているものは何なのでしょう。

私は、動物の行動を見ていて、人間が言語的にめざしているものと、ずいぶん違っていると感じるんですね。それが「物語性」なんですけども、「再帰性」と言い換えてもいいんですが、身体を用いたコ

コミュニケーションは、非常に信頼度が高い。それは、「同調」を呼ぶということです。最初に平田さんがおっしゃった「できそこないのコミュニケーション」、まあ、いうならば、言葉を使ったコミュニケーションからすると、少しこう無駄が多い、そういうものが相手の心を打ったり、相手の同調を引き出したりするというのは非常によくわかる気がする。というのは、われわれは、まだ視覚世界に非常に大きな信頼を置いていて、その中で、相手の中に入っていくってということが、やはり、タイムラグとしてどうしても必要なんですね。言葉だけに特化していくと、そういうものを排除してしまう。よく私たちが経験するのは、まだ、言葉をおぼえて間もないころに、たどたどしい言葉で話をしていると、非常によく通じるんだけど、言葉をおぼえて滑らかに喋るようになると、なかなか通じないってことがあるんですね。それはやっぱり、相手の気持ちだとか真意を探ろうとする事ができてないっていうか、そういう態度を相手から引き出せていない、そういう時間を相手に与えていないからだと思うんですね。それが、パフォーマンスを伴うと、やはり、言葉で喋るより、よっぽど曖昧で全体的ですから、相手との間に同調という空間を作り出すことができるので、それが果たせるのかなという気がするのですが。

平田

小説っていうのは、近代とともに生まれてきた、まあ、ある種特殊な表現なので、あのう、「個」っていうものが誕生し、それとまあ、「活版印刷」、それから「流通」、それにともなって最終的に「著作権法の確立」っていうことで、小説っていうのが今や文芸の王になっているわけです。でも、基本的には、人類は詩と演劇をずっとやってきたわけで、こっちのほうが歴史は長いわけですよ。元々を辿ると、先ほど言ったように、ま、これは文化人類学の世界で、人類発生頃の話になるわけですがけれども、どんな未開の集落に行っても、ダンスとか演劇的なものってのは必ずあって、どうも、コミュニティーを維持するには、過剰なものっていうか、あるいは、過剰なものを生産するような祭りのなものってのは、どうしても必要だったんだろうというふうに考えられています。これも、要するに、私たちの社会を構成する上で、どうしても必要だった。

これが、きょうのもうひとつの主題である「新しい広場をつくる」ってところにも関わるんですけども、例えば、東日本大震災で有名になった女川町っていう町がありますね。壊れなかった原発がある町です。ここは、入江がすごく入りこんでいて、被災が最もひどかった町です。家屋の70%ぐらいが流されてしまいました。ここは、ちいさな集落がたくさんあって、その集落ごとに、夏祭りで「獅子舞い」をやるんです。そのお獅子も、全部流されてしまいました。ただ、これは、結構、復活は早かったんです。各地から寄せられた義援金で買なおしたり、獅子そのものが贈られてきたんです。それで、あそこは、もう高台移転しかないんですね。これ、みんなわかってるんだけど、なかなか合意形成できなかったんです。ところが、それが、文化人類学者も驚くほどに、獅子舞いが復活した集落から高台移転の合意形成ができてきたんです。そりゃ、人間ってのは不思議なもので、経済合理性だけで話し合っても、土地の面積がどうだ何だ、という話になるんだけども、100年、200年続いた獅子舞いをみんなで作ると、「まあ、やっぱりいろいろあるけど、みんなで移るべい」ということになるわけですよ。恐らく、そういう機能が、やっぱり演劇とかダンスとかにはあって、まさに、その、シンクロニシティみたいなものが、非常に大きな効果を果たしているんじゃないか。

もうひとつは、特に、今私たちが考えている演劇ってのは、起源がはっきりしてしまっていて、2500年前に、ギリシャで生まれた、システムとしてはですね。この2500年前というのは、アテネで民主制が生まれた時期です。恐らく、民主制が生まれた時、アテネの人々は驚き、戸惑ったと思うんですね。それ

までは、王様や貴族が決めていてくれたことを、自分たちで決めなきゃいけない。でも、その自分たちという一人一人はバラバラなわけです。そのまま議論すると、声の大きい者、力の強いものの勝ちで、もとの黙阿弥になってしまう。ところがですね、そこからがアテネの人々の偉かったところで、二つダイアログの訓練方法を、人類の遺産として残したわけですね。ひとつは、もちろん言わずと知れた「哲学」です。弁証法という考え方を生んだわけですね。もうひとつは「演劇」でした。当時、アテネの市民にとって演劇祭への参加は、権利であると同時に義務でもありました。



何かがあると舞台に立たなければならなかった。恐らくそれは、イニシエーション的な、市民になるための教育機関だったわけですね。哲学が、「異なる概念」を摺り合わせるような知的作業であるとすれば、演劇祭への参加は、「異なる感性」をすり合わせるような、要するにイチゴの好きな奴とメロンの好きな奴がいて、イチゴが好きな奴にメロンが好きにさせることはできないですね。でも、「ちょっと、イチゴに、メロンを添えてみたら美味しいよ」、みたいな、ネゴシエーションっていうのができるわけで、恐らく、そういうことを集団で学ぶ機能が、演劇にはあった。ま、これ、実は、遠いギリシアだけの話ではなくって、日本でも、農村歌舞伎とかお神楽とかっていうのは、イニシエーションとして確実に機能していったわけですね。ですから、そういう要素ってのは、共同体維持のために、確実にあったらと思うています。

高田

1960年代の学生運動は、ずいぶん理屈っぽくやってたじゃないですか。それが衰えたあとに山城祥二（本名は大橋力）さんの主宰する「芸能山城組」が出てきますよね。それに、どこか似ているような気のする「YOSAKOI（よさこい）」が、最近是非常に盛んになっています。こういう現象を、今の話の文脈に位置づけると、どういう捉え方ができるのでしょうか。

平田

あのおう、ここは難しいところで、YOSAKOIは、ほんとにいい点と悪い点があってですね、日本みたいに同調圧力の強い国で、YOSAKOIだけにしてしまうと、どうでしょうか。あれ、非常に同調圧力が強い行事なんです。日本型のお祭りってのは、欠点もあってですね、例えば、「このお神輿を担ぎますか。担ぐんなら、この共同体に入れますよ」というところがあるわけです。イニシエーション的な部分が、非常に強い。本来、演劇っていうのは、多様な個性を認めて居場所をつくるものなんです。ぼくは、よく、小学校の先生に、声の小さい子は、「声の小さい子っていう役」をやったら一番うまいですよ、って説明するんですけど、そういう居場所の作りやすさが、演劇が教育に生かせる一番の部分なんです。でも、「みんなで大きな声を出しましょう」というところがあるんですよね。それが、まあちょっと難しい部分なんですけど…。ただ、欠点もあるYOSAKOIで救われる子がいることは間違いありません。それを否定するものではありません。

山極

それに関連して、観客という話をお伺いしたいんですけど、日本は同調性を求めるのが強い国だとお

っしやいましたが、例えば、コンサートなんかでね、ヨーロッパでは非常にマナーを重んじますよね。ところが、日本は、歌舞伎なんかを見てもですね、結構、飲食を許している。相撲の観戦なんかもそうですね。観客が自由に参加できる。あるいはスポーツを観戦するにしても、アメリカではあるチームの地元の人たちは、そのチームしか応援していない。日本もそういう傾向はなきにしもあらずだけれど、割と自由に、外国のチームでも応援しちゃったりする。こういうような、観客がかなり自由に身動きできるようなところがあるような気がするんです。これも文化なんでしょうか。

平田

そこは、ちょっと、統一したわかりやすい答えは出せないんですけど、一応、演劇が、もちろん私の専門領域なんで、みなさんがご存じない話ができると思うんです。まずですね、諸外国を見ても、昔は自由だった、適当だったと思うんですね。そもそも、劇場にチケットを買って演劇を観に行くっていうシステムが成立したのは、大体、17世紀でしょうか。18世紀の時点で、チケットを買って劇場にお芝居を観に行くというシステムを持っていた都市は、まあ、恐らく、ロンドン、パリと大坂、江戸、そして京都しかなかった。ドイツでさえも、皇帝がオペラ作って、ただで観せてた訳ですよ。要するに、チケットを買って劇場に観に行くっていうのは、よっぽど都市が人口を抱えて、しかも中間層を抱えていない限り成立しないシステムなんです。ただ単に豊かならいいってもんじゃなく、中間層が必要なんです。自立して、チケットを買って観に行くって、すごく特殊な環境なんですね。

これ、中国や韓国はどうなっているかという、今でもそうなんです、獅子舞いや「三河万歳」とかと同じで、結婚式とか引っ越しとかで、金持ちが雇って見せていた。それから、一番多いのは、神社、仏閣ですね。お祭りをする、その時、すばらしいご本尊とかあれば、ご開帳でみんな集まってくるんだけれども、そんなすごいご本尊があるところばかりではないから、芸能者を呼んで来る。その人たちは、投げ銭で稼ぐわけですけど、これで人が集まって、その周りに縁日の露店ができて、その、まさに寺銭というものを得てお寺は儲かっていたわけです。アジアではどの国においても、そういうシステムの中で芸能というのは発達してきて、日本だけが、特殊な都市文化を江戸時代に築いたっていうことなんですね。

だから、あの歌舞伎の状況というのは、ほんとに特殊なんです。ものすごく、エンターテインメントしてもうまくできていて、これ、相撲も一緒ですが、特に、歌舞伎というのは、総合芸術の最たるもので、家族で一日中見ていたわけですね。ファッションショーの役割も果たしていたんですね。特に、江戸では。当時のファッションの中心は京都、大坂だったわけで、その流行の情報も歌舞伎を通じて得られる。それから、ほとんどの江戸の中間層は、三味線とか長唄とか何かやっていたので、その最高の芸として観に行く。要するにギリシャと同じで、やる側でもあり観る側でもあるんですね。やってみてワンセットなんで、演劇ってのは。それと、もう一つ面白いのは、歌舞伎っていうのは、1日の中に必ず1場面ぐらい、ものすごく難しいシーンがあるんです。中国の故事来歴とかを知らないと全然分からない場面ってのが。これ、何のためにあるのかというと、お父さんが子どもに威張るためなんです。お父さんがうんちくを垂れる。そこまで、歌舞伎というのは、ちゃんと用意がしてある。今のディズニーランドみたいなもんだったんですね、歌舞伎というのは。

このように、ヨーロッパの近代演劇とは、ずいぶん違うんですけど、ただ、ヨーロッパでも、今みたいに観客がおとなしく観るようになったのは、やっぱり19世紀以降で、シェークスピアのころは相当野蛮に観ていたようですから…。ぼくも、劇場史にそんなに詳しいわけじゃないですけど、あんまり違

いはなかったんじゃないかと思います。さっきの野球の関係のこととか、そこまで整合性はわからないんですが…。

山極

ありがとうございました。では、時間が来ましたので、この後、ワールドカフェに移りたいと思います。今日の共通テーマですが、若者世代ということも念頭に、日本型のコミュニケーションを利用しながら、日本の文明を世界に出すためにはどうしたらいいか、ということをお考えいただきたいと思います。平田さんが本の中でおっしゃってる「広場 AGORA をつくろう」というのもその一つかもしれません。あるいは、コミュニケーションをうまくまとめながら、日本の技術や、日本の伝統—和食が世界遺産になったんですが—そういうものを利用しながら、日本が、グローバルなところに存在感を示すためにどうしていったらいいか、をテーマにご討議していただけたらと思います。

「感激・感動する新しい広場づくりとコミュニケーション能力」

参加者間の対話を通じて答えを導き出そうというワールドカフェ。今回のお題は「グローバル時代に日本の存在感を示すためにどうしたらよいか。また日本独特のコミュニケーション手法をどう活かすか、活かせるか」について対話しました。

☆ワールドカフェ

▽第1テーブル報告 山本 勝春（浄土宗西山深草派 僧侶）

まず、日本型コミュニケーションってどう定義づけていう話をしました。で、それは「察する文化」うことになりました。その、「察する文化」の中で「察する文化」もあるんじゃないか、そういう話も出てきても、察するっていうことと同意するということとはということになりました。察するっていうのは、ここの白黒をはっきりつけんでも、曖昧な形で残しみんなわかってるやろうという考え方。同意するは、あなたがいうてること違うと思うんやけど、目上の人やさかい違うといえないから同意しますっていう考え方。こういう文化をどうやって売っていくんやろうみたいな話になっていくんですけども、まあ、そのポジティブな部分も考えながら、議論は進みました。



けるんや、かなとい「同意しました。違うよねここにあるといったら、っていうの

日本型コミュニケーション、ま、「空気を読む」っていうのも重要な要素なんだろうなということでしたが、それを生かしながら何を売っていくねんということになりました。で、まあ、日本の文明なんですけど、文明というのは、グローバルに受け入れられるものであるという考え方のもと、「おもてなし」というものは、これは世界的に理解されるだろう。和食も着物もそうだろう。「もったいない」という気持ちも、うまく説明すれば伝わっていくだろう。後、「かわいい」という考え方。キティーちゃんとか、きゃりーぱみゅぱみゅとかね、こういうものとか、ちょっとマンガっぽいもの、こういうものを作らすというか、やらせると、日本人は類を見ないユニークなことができる。これ、世界的にも受け入れられてきていて、もう日本の文化というより、文明になるんじゃないかという考えも出ました。一方で、ただ、これはサブカルチャー的なものであって、一部かなという考えもあり、また、その一部がたくさんあることこそが、日本の特徴ではないかという意見も出ていました。

話は変わりましたが、実は、私の子どもの頃は、海外に対する憧れがあったんです。アメリカの文化、音楽でもアメリカのものや英国のものばかりを盛んに聞いたものでした。ところが、最近の若い人は、ほとんど、邦楽ばかり聞いていはいはるそうなんです。ということは、海外への憧れがなくなっている、と。言い換えれば、コンプレックスがなくなっているんだなというふうにとれるかなというところがあります。ま、それが、文明となっていくのかなという意見もありました。

で、まあ、日本型コミュニケーションが生きる場面は、ということで、話が出て、会社の中だろうという意見がありました。でも、最近では、日本型コミュニケーションも変わってきたよ、という意見も出て、飲み会が会社でかなり少なくなっているようですね。家庭を大事にするというライフスタイル

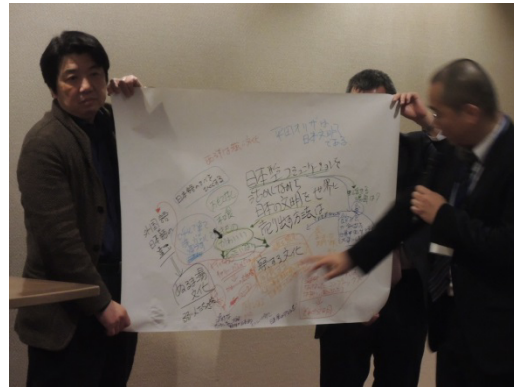
ルが主流になってきているからだ、ということなんですけど、こういう風潮の中でも、「察する」とか「KY」は形がかわっても、日本型コミュニケーションは重要だということになりました。

あと、西洋は「強い文化」、これに対して日本、東洋は「やさしい文化」だね、という話になりました。例えば、言葉の上でも、日本語なら、先ほどの平田さんの話であった「ケーキ」といえば、「ケーキがほしいんやな、この人は」、とわかると。それだけで、いけるから楽やと。これは、ある意味「ぬるま湯文化」なんだけど、むしろ、このぬるま湯文化を、弱い人たちのために広めていかないといけないんじゃないかという提案もありました。

さっきの「かわいい」を輸出するというのもあり、「ぬるま湯文化」というのもあり、インドネシアの人たちとか世界の人々が、日本の文化に憧れをもってくれている部分もあるようなのですが、世界に日本の文化をどう売り出すかということですが、わざわざ海外に行って売り出さなくても、日本に呼んできて「洗脳」して帰ってもらったらいいいという意見がありました。そのためには、日本に来てもらった時、日本語の壁を低くすることも一つのやり方やろうし、そういういろんな国に日本語学校をつくるという意見も出ていました。山口先生、最後、しめてください。

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）

「平田オリザは日本文明である」とシンボリックな方をしたんですが、平田さんのお話を聞きながら思ったことがあります。それは「ああ、日本っ国は、皮剥けたんだな」ということでした。われ時代と違って、日本は皮が剥けて、つまり、内田が「日本辺境論」で書いたようなあの世界はもう、いくつかのところで、日本中心論に切り替わあと思いました。三島由紀夫の極めて論理的で悲カチツとしたあの文章、あれは、やっぱり、彼は、



ク な 言
ら ひと
て い う
わ れ の
樹 さ ん
終 わ っ
た な
劇 的 な
特 に ヨ

ヨーロッパの文明に憧れて、憧れて、あれを描いたんだと思うわけですけどね。平田さんの演劇はそうではなくて、やっぱりこれはもう、ひとつの日本中心の、ある種その世界がそこにあって、そこに新しいオリジナリティがあるわけですよ。村上春樹を挙げても同じことですが、彼も、三島が大嫌いだという言い方をしてるんですけど、裏返すと、ああいう、日本辺境論から出発するような議論は、もう皮剥けたぜ、と。オレたちは、もう、ある種のユニークネスを身にまとったよ、ということをや彼はいつているんだろうなあと思います。そういう意味で、決して恥じることはなく、日本型コミュニケーションってというのが、そういうものをさしているとする、これはもう十分に、世界に普遍的なものとして、いろんな人たちに受け入れられるものに既になったんだ、と。だから、シンボリックに「平田オリザは日本文明である」ということを出したわけです。平田さんには、怒られちゃうかもしれませんが。

▽第2テーブル報告 内崎 直子（大阪ガス近畿圏部）

われわれもですね、日本型コミュニケーションがどういうものかについて議論しました。で、いくつか特徴があげられるなあ、ということで、例えばですね、一つは、まあ、男女の語り言葉が違う。英語ですと「I」ですが、日本語ですと、「私」とか「ぼく」とか「おれ」とかあって男らしさ、女らしさみたいなのが出せるのかなあということ。また、主語がなくても通じるとかですね、空気が読める、



つまり「阿吽の呼吸」とかいいますが、それとか、「本音と建前」とか、そういったところも日本の特徴と考えられる。

それから、もうひとつはですね、これ、日本人の特徴ということにもつながるのですが、「こうすれば相手が喜ぶよね」ということをしてしまう、おせっかいというほどではないんですが、相手のことを思いすぎるほどのサービスがあるとの意見もありました。例えば、ヨーロッパの鉄道の話があったんですけども、アナウンスが全くない中で、日本はですね、こと細かにア

ナウンスはあるし、サービスが充実していたり、おしぼりも日本で始まったということなんですが、「至れり尽くせり」というところも日本型コミュニケーションの特徴として挙げられます。

ところが、最近の動向として、そういう至れり尽くせりの中で、相手のあら探しをするような傾向がある。例えば、私、クレームを受ける担当をしていますが、ガス機器の説明書とかもこと細かに書いててですね、そのためにクレームなどのご指摘を受けることがあるんです。そういうあら探してみたいなことが、最近の特徴的な動向としてあるんじゃないかと思います。

あと、メールとかSNSとかでのやりとりが多いということですので、昔は、手紙とかで、最初に時候の挨拶とか入れていたのですが、そういうことが、省略されて、すぐに本題にはいってしまう。それがいい時もあるし、悪いこともあるという話題が出ました。

それで、日本の文明を世界に生かしていくということでキーワードを三つを挙げました。一つは「和食」。世界遺産ということで、これを機会に広めていこうということに。次は、日本らしい「礼儀作法」、三番目は「匠の世界」、職人さんの世界です。

結論的に。これをどうやって世界に広めていくかということですが、まず、どんな形でも、例えば、研修生、観光客、技術者、移民でも、とにかく世界から大いに人々を受け入れて、日本の物を幅広く知ってもらい、習得してもらって自分のミッションとかで持ち帰り、その国で広めていただくというふうなことが可能性としてあるんじゃないか。この時、京都という場所は、キーワードの三つにふれるための貴重な場所であるので、大いに京都の役割があるのではないかと考えました。山極先生、何か付け加えていただけますでしょうか。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

平田さんがスピーチの中でおっしゃっていたように、日本の若者たちは、言葉も含めて、まだ、世界の中で、揉まれていない。だから、世界からいろんな研修生を呼ぶことによって若者たちを交流させて、その中で日本の文化のよさっていうものを作り替えて、世界に、日本人じゃなくて世界の人に出してもらおう。その過程で、プロセスこそが重要という話がありましたけども、日本の若者がコミュニケーションの新しい方法を学んでいけるんじゃないか、あるいは創造していくんじゃないかな、というふうに思っています。

▽第3 テーブル報告 上田 源（同志社大学学生）



今の韓国と日本の文化政策の話になって、韓国は、経済でも、国、政府を挙げて売りに行く。故にサムスンが異常に強いという現状がありますけど、やはり日本が何かを売りに行く時、企業単体でしか戦えない。それ故に、やはりその強さってものが弱い。しかも、日本企業は、工業の成功体験っていうものが、非常にインパクトとして過去から強くあるので、それに引きずられてしまって、やはり、技術を何とかして誇示するというところに執着してしまって、それでは、相手の関心を引けるけれども感動を与えられない。感動を与えられなければ、相手が

何かを買ってくれる際の選択肢にあがらない、という話が個人的には興味深いものでした。

日本語教育の問題としては、やはり、日本語を使って、例えば、漫才だとか演劇だとかを使って、小学校、中学校で自己表現をさせてみる。それが、自己を発散することにつながる。そのために、日本語教育にもっと資金を提供していかなければならないという意見が出ており、その通りではないかと思いました。

私は、文学部の人間ですので、文学部的な質問を、面倒くさがられるほど平田先生にしていたんですが、60年代、70年代というのは、先ほどから、山口先生もおっしゃってましたけども、三島が世界に対して売っていましたよね。三島の時代で、現代は、村上春樹の時代であるということなんですけど、三島由紀夫とかっていうのは、60年代、70年代において、グローバル的になっていく社会の中で、内容がジャパネスク的である、若干奇をてらったもので世界的に受けなければならなかったという話があります。でも、現代というのは、そういう先駆者たちのおかげでですね、実力で勝負が可能な世界にちょっと変わってきているんじゃないのかと。ここで売れないのは、単純に、日本人が能力がないだけじゃないの、と。つまり、ちょっと、日本の内向性、日本人にしか受けられないような文学しか書けない。つまり、「永遠のゼロ」を輸出しても、多分売れないだろうな、と個人的には思ってるんですけども。で、えっと、面白いのはJリーグの話で、あのう、西洋と日本のマーケットの差で、今までは、日本人しか呼んでこられなかったものを、Jリーグというのは、世界中から人間を呼んでくることに成功したわけです。ブラジルとか世界中からスタープレイヤーを呼んできて、で、だんだん、20年を経て、とうとう香川や本田が、ミラン、マンチェスター・ユナイテッドに行きなんていうふうに、だんだん輸出の成功が、Jリーグに見えるんじゃないのかな、という話が出ていました。

最後になりますけど、オリンピックが誘致されましたね。さっきまでの話は、何かを輸出するという話でしたが、輸入するということが1個成功したわけです。で、じゃあ、このオリンピックを日本の中のみとするのか、それとも一つ、せつかくだから、アジア全体、それは、中国とかだけじゃなく、東南アジア地域まで巻き込んだそういった一つのムーブメントを作っていくのか。これ、後者をやることが必要で、その中で、日本文化が揉まれることで、日本文化がさらに成熟していくんじゃないのかなという話がありました。

▽第4 テーブル報告 織田 篤（堀場製作所法務部チームリーダー）

私どもは、外に出ていくために、何か特別なことを新たにしなければいけないか、というところから議論が出発いたしました。そうじゃないでしょう、と。やっぱり、日本が外国で受ける理由は、やっぱり日本らしいものが受けるのであって、そうであるならば、よいものであれば普遍的であると、自信を持って外に出ていくべきではないかという、ざっくりした前提ですけど、そういう風な観点から議論を進めました。

で、まあ、具体的に特定の製品とかサービスを外に出していくということを題材に議論した方がいいだろうというので、何故か日本では人気で外国ではあまり人気がない「ウォシュレット」の例を中心に議論したわけです。

なぜこれだけ日本では普及しているのに、外国では、それほど売れないのかというところですけども、なかなか根本的なところでは核心には迫っていませんが、どうやって売っていくのがいいか、マーケティングの方法もいろいろ議論いたしました。ウォシュレットのよさがですね、外国人の方にはなかなか伝わっていないんじゃないか。五感に訴えるというところを重視するべきであって、「新しい心地よさ」みたいなですね、そこを新興国とか先進国の中間層のところに、もっともっとPRしていけばいけるんじゃないかと。

そのためにどうするかというと、イメージ戦略が重要であろうということで、映画の印象的なシーンで使えないかとか。ツーリストマーケティングというアイデアもございまして、日本人が外国のホテルに泊まった時、みんなが、アンケート調査に「ウォシュレットをつけてほしい」というのを書くようにする。これ草の根運動ですけども、結構効果があるんじゃないか。それから、オリンピックの選手村に絶対入れると。それで、世界のトップアスリートにウォシュレットのよさを体感してもらう。それから、もう実績として、ボーイング787には導入されていることのようなので、こういう形をどんどん広げ、新しい価値を外国人に伝えるという意味で、ウォシュレットをもっと輸出していこうということで議論いたしました。

高田 公理（佛教大学社会学部教授）

うまいことまとめていただきました。あらためて考えてみると、ウォシュレットって、非常に微妙な技術が詰め込まれているんですけども、ローテクなんですね。おしりを洗うってローテクでしょう。実は、この席には、森口さんという染色のプロがいらっしやったので、ちょっと話をし
てたん
という
みんな
ディゴ
出るん
今や、世
クの、と
な技術
出され
たいな
の

ですけれどもね、日本には昔から藍染め染色の方法があって、これ、アジアにはあるんですが、近代以降、ドイツのインに全部駆逐された。これは鮮やかな青がですね。しかし、やや、味わいに欠ける。世界的に、日本を中心とした非常にローテク
いっても、とても微妙な塩加減など高度があるんですけど、そういうもので生みた藍染めの、なんとも言えない味わい
みものに対する評価が高まり始めている。この辺りがかなり売り物なんじゃないか。



それから、あの「お・も・て・な・し」の女性、何と言いましたかな、あっ、そうそう滝川クリステル、この言葉が大変ヒットしたんですけど、彼女がいわなかった事があるんですね。「おもてなし」というのは、本来、「ともに持って何かを成し遂げる」という意味で、これ、16世紀の日本のお茶席です、武器商人と武士の親玉が会って、そこで、お互いの命の安全を保障しながら交渉した時に、どういう意味が生まれたんかは知らんけども、ひとつの課題をともに持って、なにか新しいことを成し遂げるという、そういう、いわば非常に高度なコミュニケーションのプロセスを意味する言葉だったんですね。それを、滝川クリステルは、非常に良いサービスを提供しますよというところに矮小化してしまいました。これ、きちんとわれわれ日本人の「おもてなし」に対する考え方「ともに持って何かを成し遂げるんだ」というふうなことを伝えていくようなことを、これからきちんと主張していくべきなんじゃないかという話も出たので、補足しておきます。

クオリアAGORA事務局

みなさん、ありがとうございます。では、平田オリザさんにクオリア AGORA にご参加いただいた感想と、先ほど、山口さんが「平田オリザは日本文明である」とおっしゃったことに対して、どういう見解を示されるのか、その辺も含めて最後にお話ししたいと思います。

平田 オリザ（劇作家 演出家 大阪大学大学院コミュニケーションセンター教授）



いろんなことをお伝えしようと思って、駆け足になってしまったので言葉足らずになってしまったところがあったと思います。まあ、先ほども言いましたけれども、日本の文化、ネーション、同質性の中で暮らしているのは、とても心地いいわけですね。ぼくも、ヨーロッパで仕事をして日本に帰ってくると、ああ、ほんとにいい国だなと思う。すごしやすいし、人情は熱いし、みんな親切だし、清潔だし。でも、私たちが心地いいと思ってるのが、海外の人にとってもすべて心地いいとは限らないわけですよ。そこが問題なんだと思うんです。で、それは、やっぱり、私たちの文化ってのが、残念ながら島国なので、あんまり揉まれてないわけですよ、国際社会に。本論でも申し上げたように、ドイツとかフランス、スペインの文化ってのは、ヨーロッパという大きな流れの中で揉まれてヨーロッパ文明ってものをうみだしてきたんだと、ぼくは考えています。ですから、ぼくが回答するとすれば、やはりこれからの日本文化は、東アジアの文明圏、あるいは文化圏の中で揉まれて、そして世界化していくのが筋道じゃないか。山極先生がおっしゃっていたように、手っ取り早いのは、アジアからたくさんの優秀な学生に来てもらって、日本の学生たちに、自分たちが心地よいと思っている価値基準が、実は、時には、人によっておせっかいに感じることもあるんだよ、ということを経験してもらうことは大事だと思っています。

山口先生からは、「日本文明」と過分の言葉をいただきましたが、多少それを受けてお話するとすれば、私の人格形成で大きかったのは、16歳、17歳の時に高校に行っていないで、ずっと世界中を旅行してたんですね。これは主にアメリカとヨーロッパです。そして、大学に入ってから、アジアの国に行こうと思って、韓国に1年間留学して、一応韓国語が喋れるんですね。このことは、ヨーロッパで仕事をしていても非常に大きくて、まあ、文学とか芸術の世界では、ヨーロッパでは、ポストコロニアリズムとって、植民地支配の問題について、右か左かは別にして、そのことについてちゃんと喋れなければ

相手にされないわけです。これ知識人の必須の項目です。そうはいつでも、彼らは、アラビア語を話せるわけではないですね。それで、「私は韓国語が話せるが、何か」というと、向こうは黙っちゃうわけですね、非常に強みなわけですね。この韓国留学の1年間の体験は、ぼくの考え方みたいなものを非常に普遍的にした。要するに、日本と欧米の対比だけではなくて、韓国というもう一つの基準を持っていることによって、多少なりとも、多くの方、ヨーロッパに行ってもアメリカに行っても、大学で授業を持って、比較的、相対的に教えられる。ですから、これからの日本の学生も、当然やはり欧米に行く学生が、減ったとはいえ多いと思いますが、短期でもいいので、もうちょっとアジアのいろんな国に行ってほしい。そうすれば、いろんな文化にふれて、そのことによって日本文化の特殊性と普遍性が明らかになると思っています。ぼくも、そういう機会を、学生にも作ってあげたいと思っています。きょうはどうもありがとうございました。